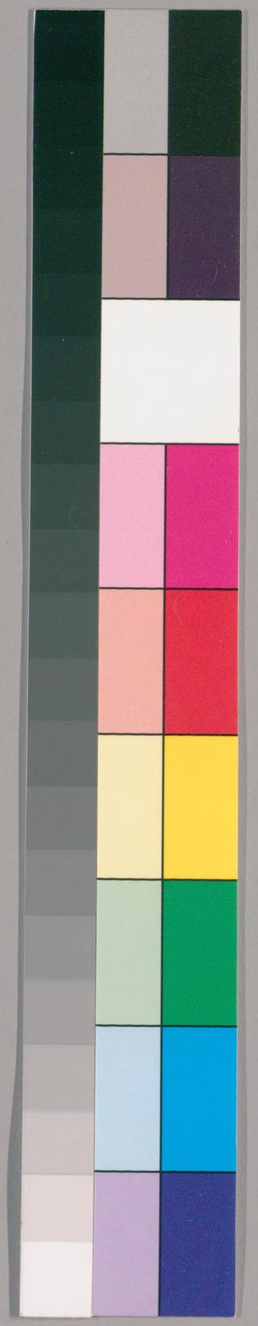


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

江戸名所図会

124
20
114

東京圖書館
和書門
地理類
礼函
六架
二〇號
二〇冊

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

連ね燈の光ハ玲瓏としく流に映せ樓船扁舟所せくをめひつゝ
一時に水面を覆ひかゝしてあたりも陸地に異ならす絃歌鼓吹を
耳に満て囂しく実に大江戸の盛吏なり

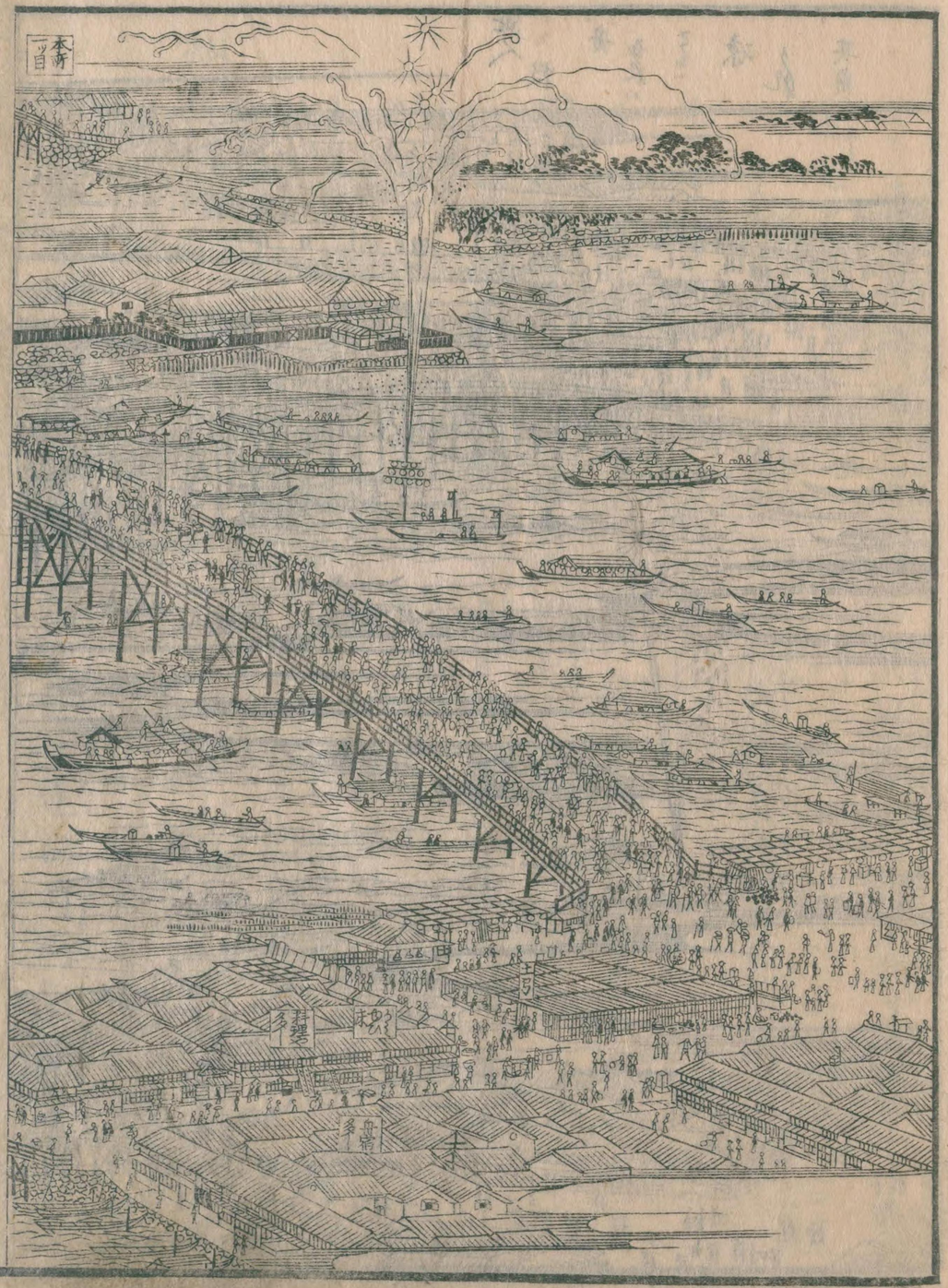
此人数船なきハて来たるみとの郷　其角

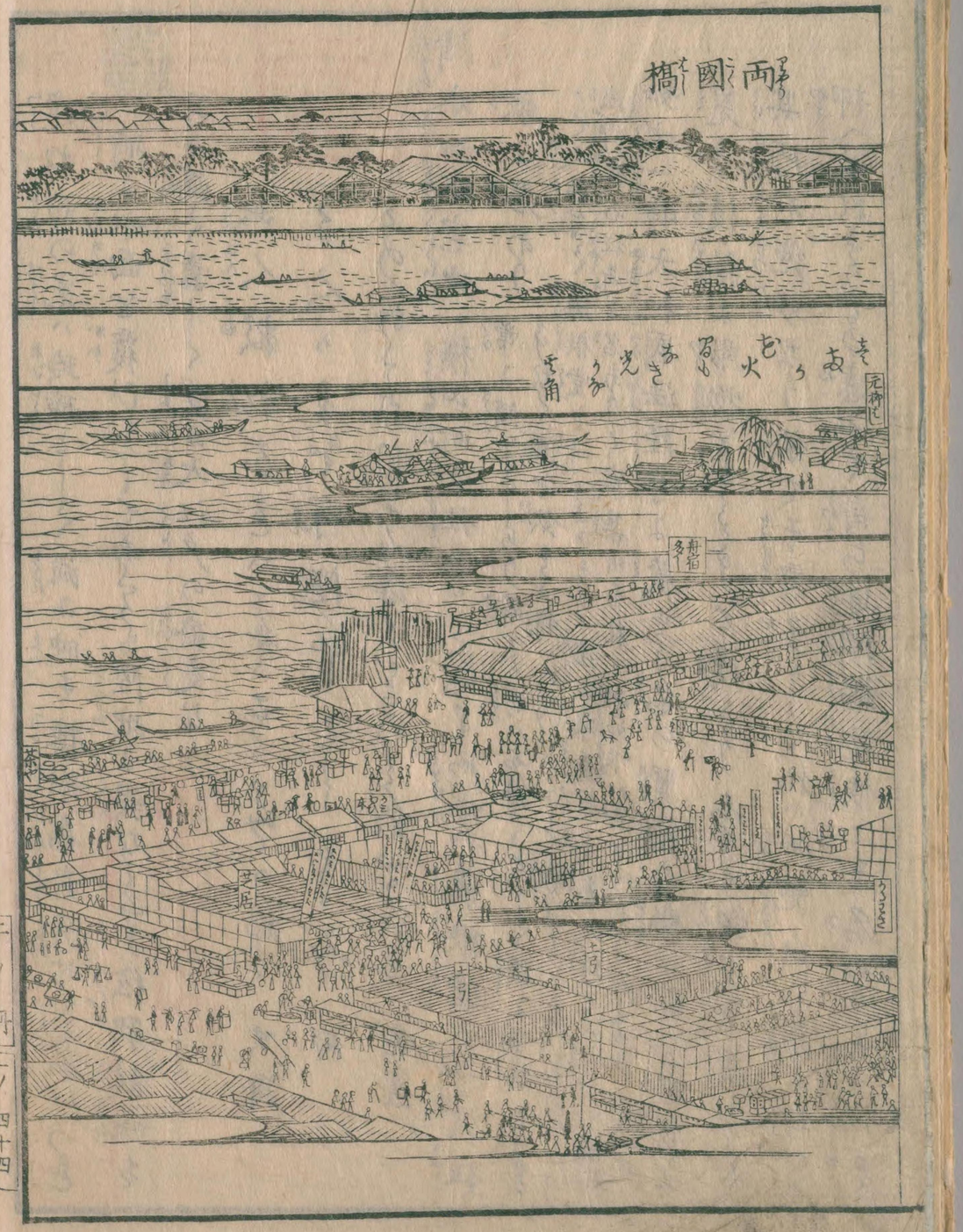
子人ゝ手を探檝やたしもたゝみ　同

このあたり同にみゆるものこれすくし　芭蕉

清水如水宅地　横山町に住けるといへるもの水ハ藤根堂と号に狂
歌に名あり　常に酒をたしなり酔さる時ハしゆくとして猥に言語を発せ
すなく酒を飲せる時ハのひくとして勢ひよくたひあるなれハ
とて人名付て藤根堂と呼けるとなり按に雄長老ト養又近くハ九州の甚久
法師抔各狂奇に名ありて家集もあれと此如水ハ名さへしる人まれなり
如水一時大和國法隆寺に蔵せる不の賢聖の瓢といへる器物を
見て後瓢に彫物をせるものを得たりしかも鈍刀を用ひて
其巧尤絶妙なり依て其需多かりけれハ此匏瓜の為に身を
押へられたりとの意にて自ら迷淵蟠鯰候とそ名のりける住家

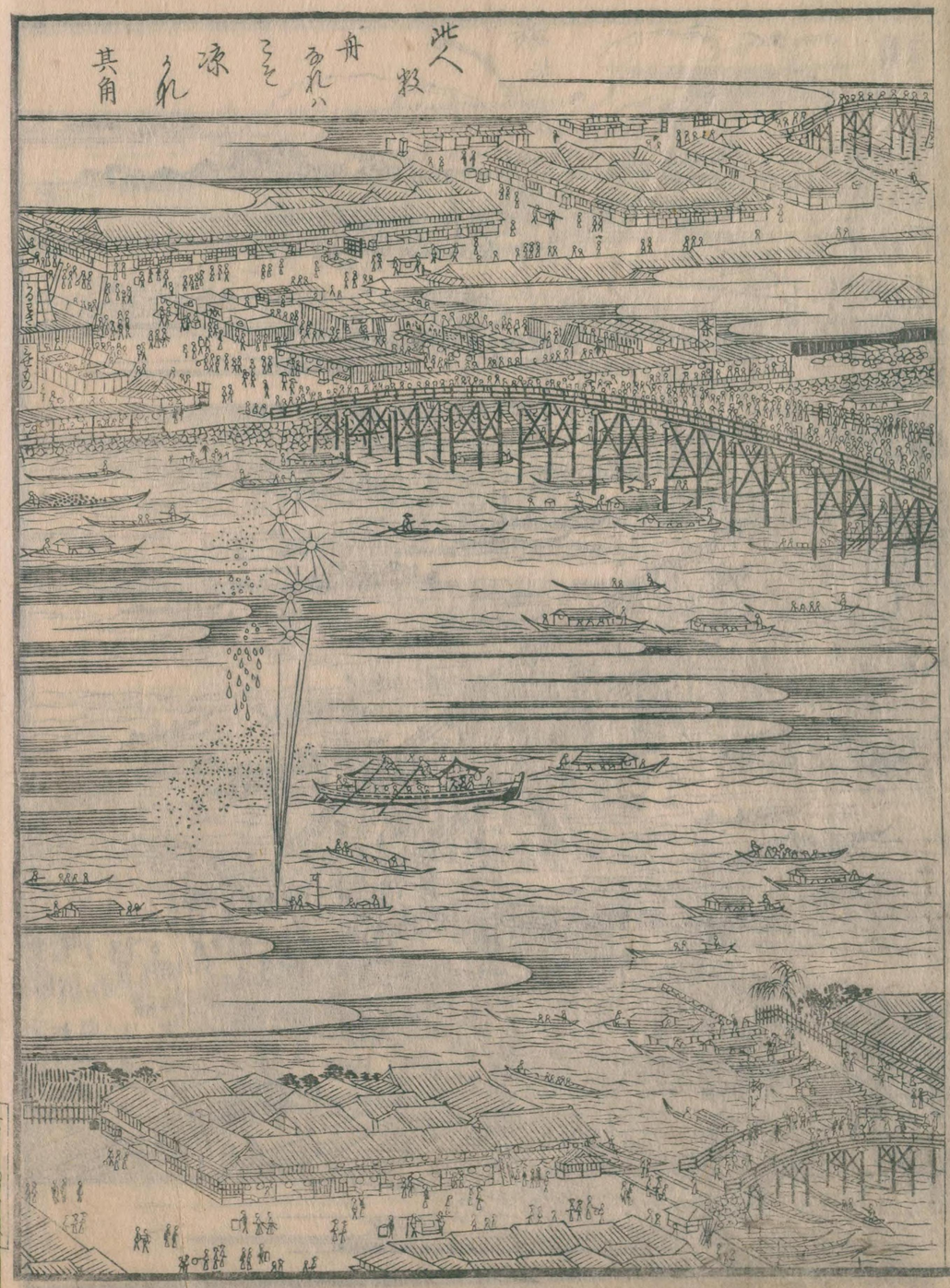
東京図書館
鼓舞原芳梵紀本





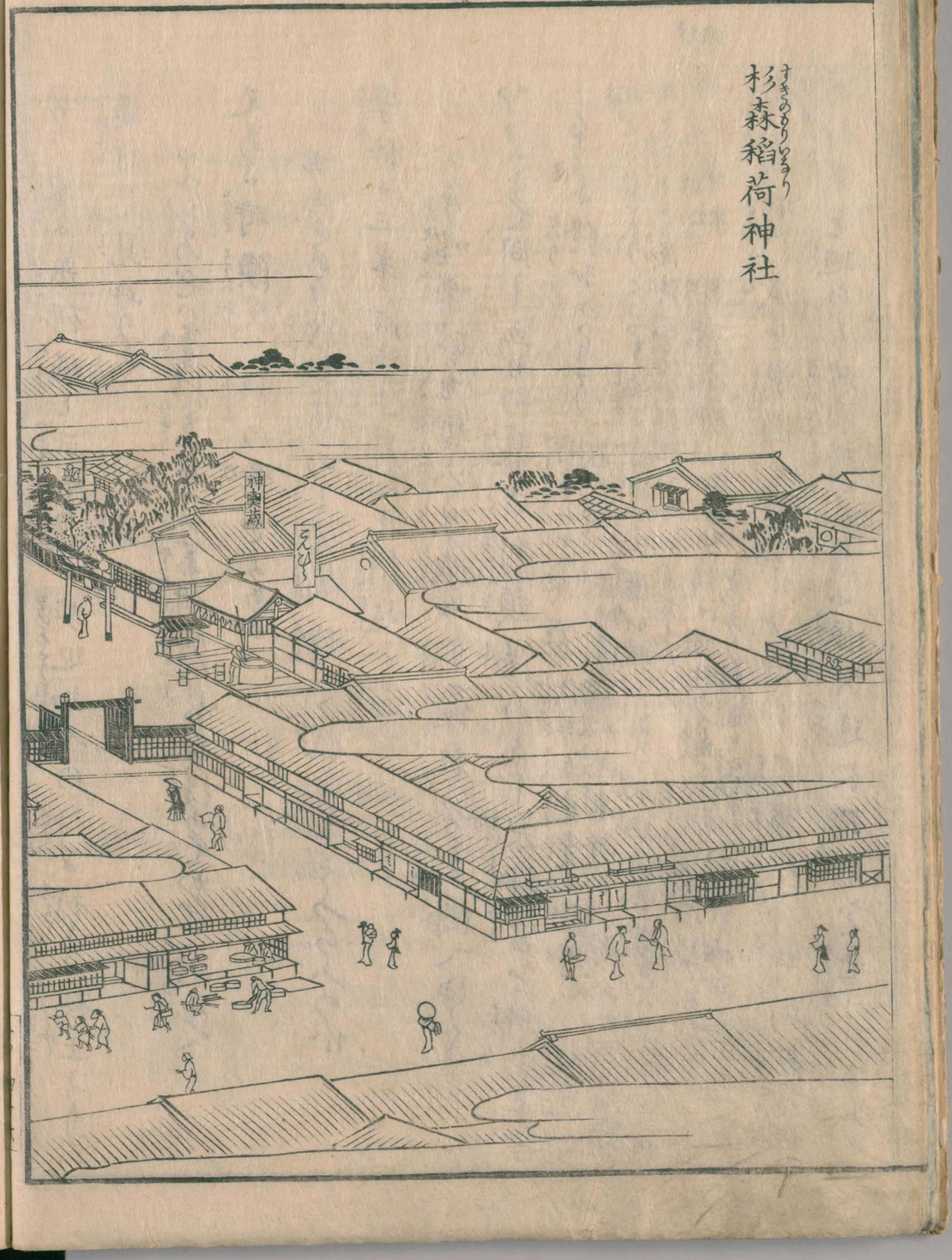
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



より東に茶研堀と云所あり其辺知人の許に行く樓上より
遠近を見やりて
見ゆるせハ茶研堀月ハ白湯にてかけハ水にて
又ある時漁父の辞の意をよめる
世をもあり我ありのこ濁酒醉ふ夜にてさふらふの水
享保十三年戊申正月三日朝起て
公の喧嘩地震雷火の喩日飢饉炊なき國へゆく
かくよして同し五日の暮方剃頭湯あらし太神宮を拜しまり
しまふに終をとゝまり
行年七十二歳今も浅草金竜寺に墓碑あり石を以て
瓢の形に造立す如幻菴東湖老和尚此如水臨終の
記をかくまとりといへり按に墓碑に一陽如睡とあり水睡同音なれハ其臨終の
相を表して没後文字を如睡と改めしなるへし
杉森稲荷社　新林木町にあり俗に當社ある所に紫
をいなり新道と字す　社記云此神像を
相馬の将門威を東國にし逞しらせし頃藤原秀郷朝敵誅伐
の計策を廻らし此御神の加護に依て遂に将門を亡しこれ

杉森稲荷神社



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

後霊夢を感し此地より至る杉の森あり祠を崇め祀る
當社寛正の頃東國大ひ旱魃を太田道灌江戸城よりひろく深く
是を患とし此御神ひ禱るに其驗ありて雨降り百穀大ひ
登る依て頃山城國稲荷山を摸して伍社の御神を勸請
まつるとなり毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀也
園ありて糸詣の道となりし元禄十六年本多弾正少弼忠晴寺社の
観林なりし時社へ糸詣の道を開きその
立つと深くりしより又此地の或古老の
高戸の地ゆく彼宅地よりあり稲荷
此辺火災より依て焦土となりし頃此祠
吉川氏某深く信仰しく新に甍子と
川町旧名を称宜町と云昔當社の
とされとも此説信しくし

歌舞妓芝居　堺町葺屋町あり

甚三郎　堺町狂言座元の始祖なり初道順と
号す　菅禁闕及ひ當中に
時綱の音頭を祖ハしめら也し
摩　狂言の衣裳及し
猿若　勘三郎の揚幕等今猶
木挽町　寛永元年甲子の春中村
當社松ハ町屋の後

号す　菅禁闕及ひ當中に
又ハ官舟安宅丸大江戸の川口へ入津の
時綱の音頭を祖ハしめら也し
摩　狂言の衣裳及し
猿若　勘三郎の揚幕等今猶
木挽町　寛永元年甲子の春中村
當社松ハ町屋の後

園ありて糸詣の道となりし元禄十六年本多弾正少弼忠晴寺社の
観林なりし時社へ糸詣の道を開きその
立つと深くりしより又此地の或古老の
高戸の地ゆく彼宅地よりあり稲荷
此辺火災より依て焦土となりし頃此祠
吉川氏某深く信仰しく新に甍子と
川町旧名を称宜町と云昔當社の
とされとも此説信しくし

歌舞妓芝居　堺町葺屋町あり

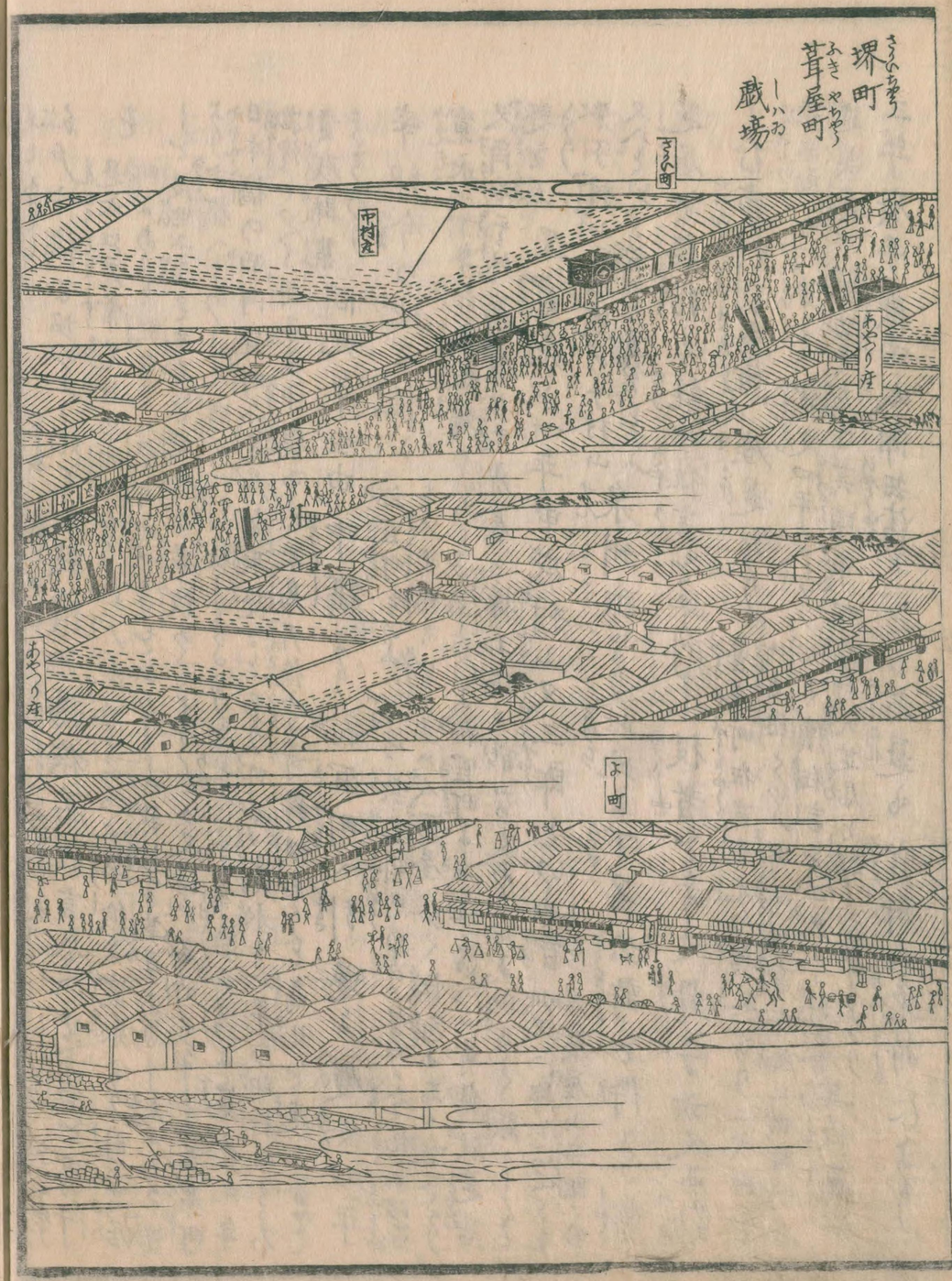
甚三郎　堺町狂言座元の始祖なり初道順と
号す　菅禁闕及ひ當中に
時綱の音頭を祖ハしめら也し
摩　狂言の衣裳及し
猿若　勘三郎の揚幕等今猶
木挽町　寛永元年甲子の春中村
當社松ハ町屋の後

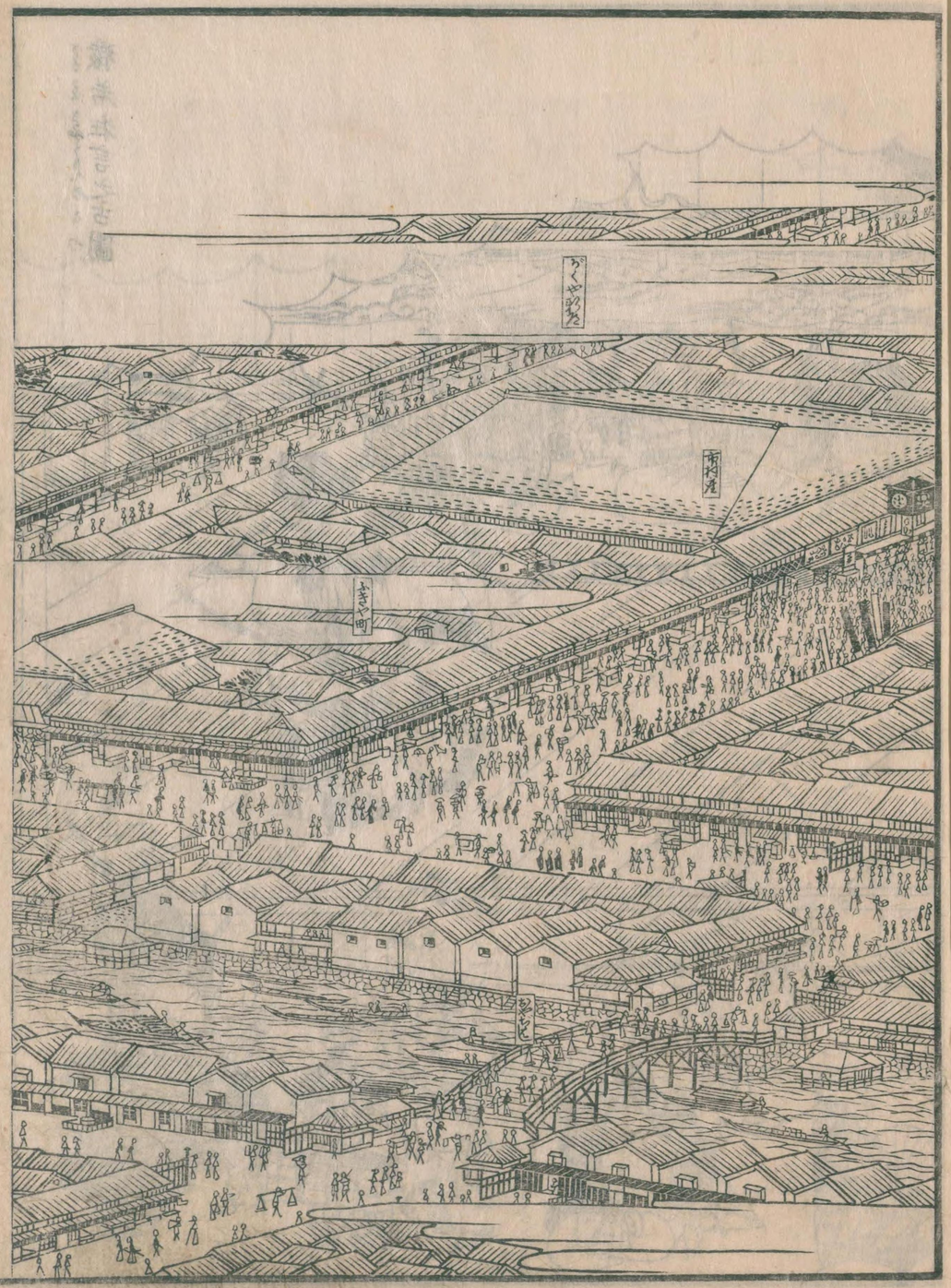
江戸中橋より始て太鼓檜を揚猿若狂言尽の芝居を興行
是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子と云なるん抄に
も前ハ芝居町よりありしと記せしハ柴井町のことを云
しと後世ふ至て芝居を柴井より書改やくるを又江戸名所
より中橋へうつり又堺町へうつり移しくるを挙て事跡合考より寛永元年
日本橋の西河岸町ふ芝居を取建ることあり可考寛永十八年の印行のそうろ
冊子より中橋ゆく米島丹後守奇舞妓ありと高札を建そこそ
貴賤群集同九年壬申中橋より祢宜町へうつり遂より慶安四年
辛卯今の地より移る祢宜町ハ今の長谷川町のなり今俗より堺
寛永二十年印本吾嬬ハ人形屋多く住ふ故ふ名ある唱へくる
又角力外薩摩太夫虎屋ら操土佐ら能なとありる由ふく賑しき
趣を挙又寛永十一年甲戌村山又三郎といふ者此又三郎と名獲屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山又八とそ云者の次男なりとの
又八とそ云者の次男なりとの泉州堺より此地より下り公許を得く常
芝居を興行し能の狂言をもしむ市村羽左衛門座是なり
役者をまねへ舞子六人ふ勤
堺町葺屋町狂言座元の興起なり二代目を
葛三郎の門弟うり寛文四年より始る竹之丞といふ者
道具建を製出ふ其頃市村座元二代目明石
三年庚子森田太郎吾清と云狂言を工夫し引幕其後萬治
官府の免許により

江戸中橋より始て太鼓檜を揚猿若狂言尽の芝居を興行
是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子と云なるん抄に
も前ハ芝居町よりありしと記せしハ柴井町のことを云
しと後世ふ至て芝居を柴井より書改やくるを又江戸名所
より中橋へうつり又堺町へうつり移しくるを挙て事跡合考より寛永元年
日本橋の西河岸町ふ芝居を取建ることあり可考寛永十八年の印行のそうろ
冊子より中橋ゆく米島丹後守奇舞妓ありと高札を建そこそ
貴賤群集同九年壬申中橋より祢宜町へうつり遂より慶安四年
辛卯今の地より移る祢宜町ハ今の長谷川町のなり今俗より堺
寛永二十年印本吾嬬ハ人形屋多く住ふ故ふ名ある唱へくる
又角力外薩摩太夫虎屋ら操土佐ら能なとありる由ふく賑しき
趣を挙又寛永十一年甲戌村山又三郎といふ者此又三郎と名獲屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山又八とそ云者の次男なりとの
又八とそ云者の次男なりとの泉州堺より此地より下り公許を得く常
芝居を興行し能の狂言をもしむ市村羽左衛門座是なり
役者をまねへ舞子六人ふ勤
堺町葺屋町狂言座元の興起なり二代目を
葛三郎の門弟うり寛文四年より始る竹之丞といふ者
道具建を製出ふ其頃市村座元二代目明石
三年庚子森田太郎吾清と云狂言を工夫し引幕其後萬治
官府の免許により

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

堺町
葺屋町
戯場





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

猿若狂言之古圖

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といふる者の二男又七とのゝるを養子とし名を森田勘弥と改む（木挽町狂言座元なり）同巻木挽町の下より詳へ

其餘堺町葺屋町の間より操座木偶芝居ありて四時よ賑ハへり（元禄閑板の江戸鹿子より堺町葺屋町の二丁ハ古へより操見せ物又ハ狂言尽しあるひハ放下の品玉縄切の曲を業とする者とも寄あつまり終日観永をの地とあり又江戸名所記ニハ薩摩土佐の太夫和泉豪浄瑠理天満ハ太夫江戸孫四郎江戸半太夫うたひ説経鶴屋源太郎ゟ南京あやつりのあり

ことをもるせり

吉原町舊地　和泉町髙砂町住吉町難波町等其舊地なり（住吉町難波町）

もの河岸を竃河岸と字もるハ竃屋多きが故俗称なり此和の小溝ハ則昔の曲輪の外堀ありと云

慶長十七年庄司甚右衛門

とのゝる者街を一所ゟ定めゟり度旨官府ゟ許へまりしかバ

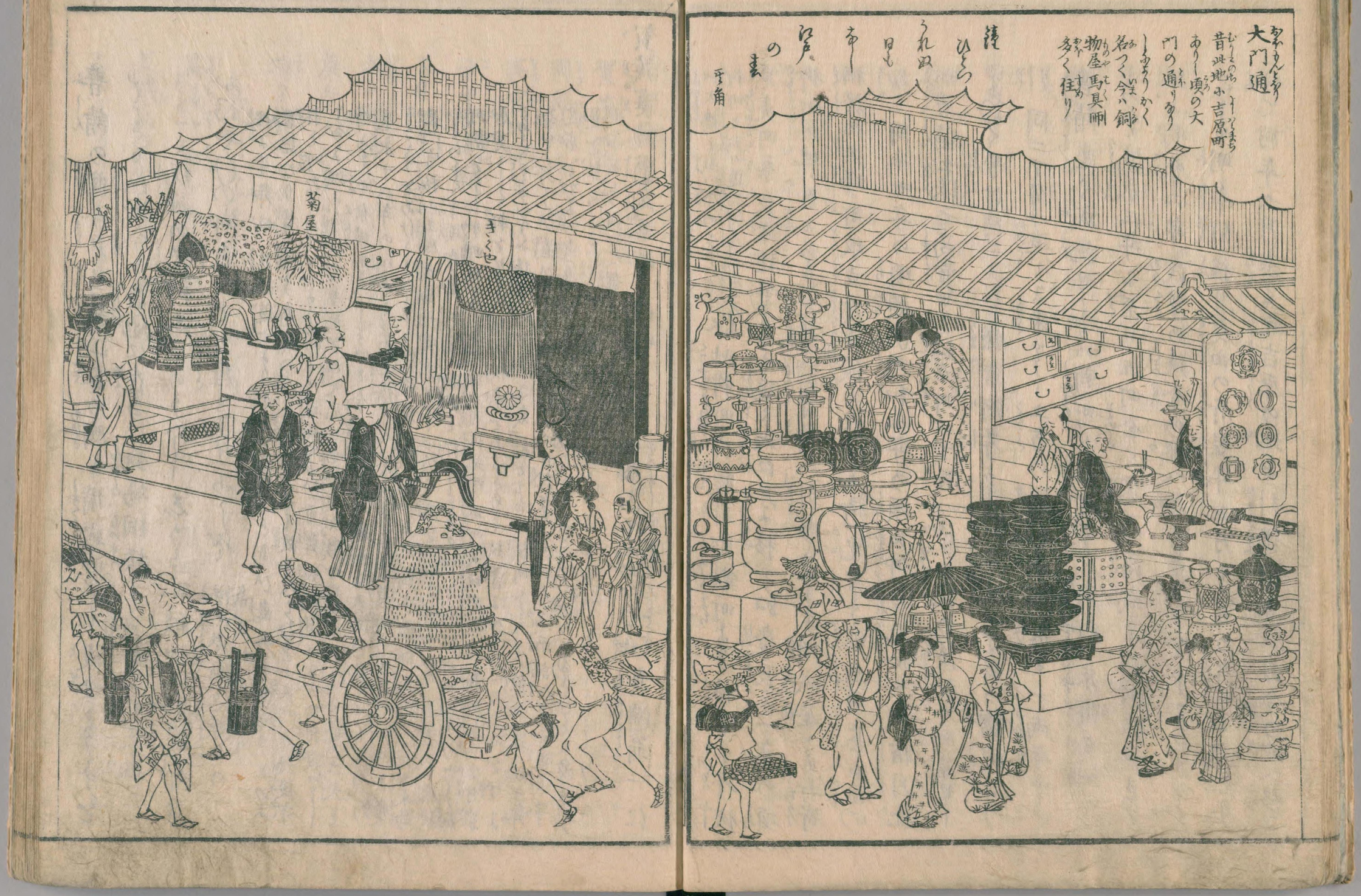
初て此地を賜り花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸ゟ定まる傾城町もあく二軒三軒つゝかこふ散在せしを其中軒を並へられしハ麹町八丁目ゟく十四五軒ありしが何とも京六条ゟり迂る又鐵倉河岸ゟと十四五軒大橋掛町ゟと廿軒ありしと云

此大橋と云ハ今の数寄屋橋と云ハ道三河岸の辺とのみ此柳町へハ駿府弥勒町ゟり移まる外伏柳町と云ハ江戸ゟ移まる慶長十一年の頃見吉町奈良木辻等ゟも追く大江戸ゟ移まる慶長十一年の頃柳町の地ハ召上らるゝ元誓願寺前へ引移らるゝ傾城屋とも打寄相談の上場所取立度由願ゟれとも御免なく庄司甚右衛門初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃ゟ仰付元和三年霜月地形普請出来て高賣せり江戸町一丁目ハ浦一統の後初て開基せり

少ゟかく号け同二丁目ハ鐵倉河岸ゟ引京町一丁目ハ麹町ゟ引同二丁目ハ追く来まる上方の傾城屋を置まる一両年やて普請悉く成就せるゟハ新町と名付くり角町ハ京橋角町ゟり

うつまる寛永三年ゟ至り五町全く家居落成しく此に移まる然ゟ明暦二年浅草の後今の地へ迂さるゝをやうやくとゝ

いへとも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火ゟ焼亡す依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

普請の間今戸鳥越山谷の間に借宅して渡世ありけるを
ゆるさる花街今に舊地に在るハ戯場相接し滋繁昌を極むべ
きまで祝融の祟弥しばしばなりしかば彼地へ移されける
おほやけの御恵いと有難きことなりしぞ（縁六巻新吉原町の条下に詳なり）

按に哥舞妓ハ其始遊女より出たる名にして哥ひ舞の妓女なりといふ畧語なり昔ハおしなべて高貴の人に愛せられし故にたはむれに長門守丹後守抔と呼なしけるよりおのづから遊女および哥舞妓役者に太夫の称を授かりしものなり故に今在言座元を太夫元と唱へ若女形の藝に長じたるを太夫と呼ぶもその余風なるべし されど今大江戸にてハ遊女に太夫の称をとゞめしのみ寛永十八年の印本そゞろ物語といへるものに此吉原町の哥舞妓女を愛せらるゝものをあげけるに中にも佐渡島正吉村山左近國本織部北野小太夫出来島長門守杉山主殿米島丹後守などいひて名を得し遊女あり是等ハ一座の太夫なればかゝる其頃哥舞妓多く和尚と称せしとぞ又日を重ね此町繁昌せるにより町割をなし本町角町京町江戸町伏見町堺町大坂町墨町新町抔と名付家居美しく軒をならべ草の仮家をあらためて板葺に作りて又本町を中にしてそのめぐりに揚屋町を置き幾筋ともなく横町をひらきて能奇舞妓の舞臺をしつらひ置ひとしく與行しけるよし記せり又江戸名所記にも遊女等芝居をかまへて奇舞妓をなせしに皆人めでまどひて世のさまたげともなりければ是を禁ぜられしより後ハ若衆哥舞妓と云ことを與行ありしかハ此年に奇観ハ世に舞せるとなり

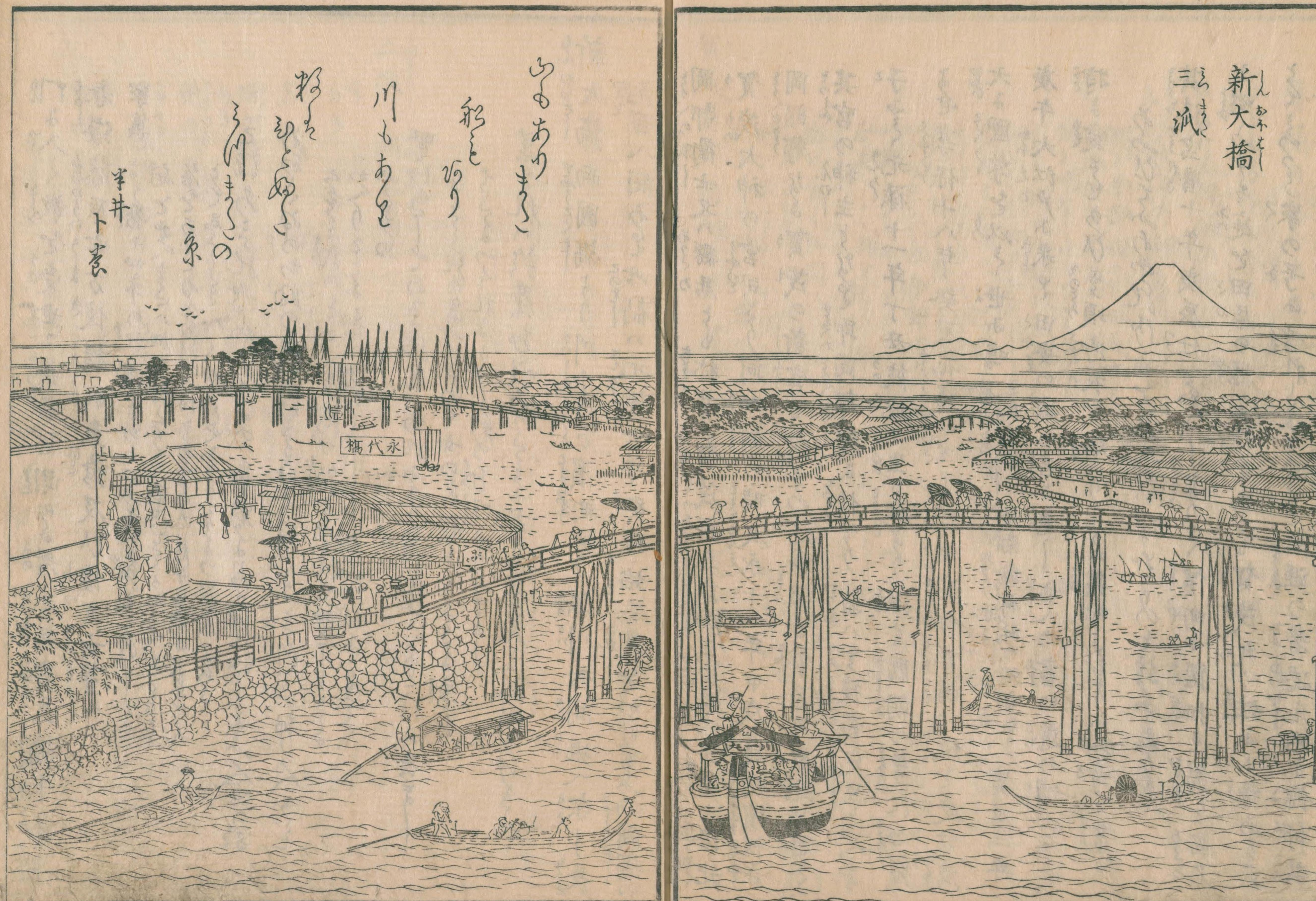
賀茂真淵翁閑居地

濱町にあり 真淵翁一に（宝暦十四年此地へうつり住す家集にみえたり）岡部衛士又ハ縣居とも称せり賀茂縣主成助の末葉にして世々洛北賀茂大神の宮司たり同師朝の時文永十一年甲戌遠州濱松庄岡部郷なる賀茂の新宮を斎まつるべき詔を蒙りて又彼地を賜はりて其宮の神主となりしも即岡部郷に住せり翁ハ其後裔定臣といへるの子にして元禄十一年丁丑彼地に生る壮より深く國朝の学に心をよせ享保十八年癸丑花洛に至りて荷田宿祢春満の教を受け後大に國学を以て世に鳴る（荷田宿祢ハ本姓なり世に羽倉斎宮と称す此人ハ洛南稲荷社の祠官なり）寛延三年庚午大江戸に来りて田安の殿の召に應じ古への書の道の博士として特に愛させたまひ其頃御衣を賜はりしかハ其かしこまりに和哥を奉る

あかひさすおほん衣を氏人のかつくものとは神やしりけん

其後宝暦十年庚辰仕をかへし奉りて濱町に隠栖す翁を縣居と唱ふるハ庭を田居の様に作りしも賀茂氏の姓にも縁あるゆへとぞいふ家の号に呼れたるとかや生涯の著述凡六十餘部其

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

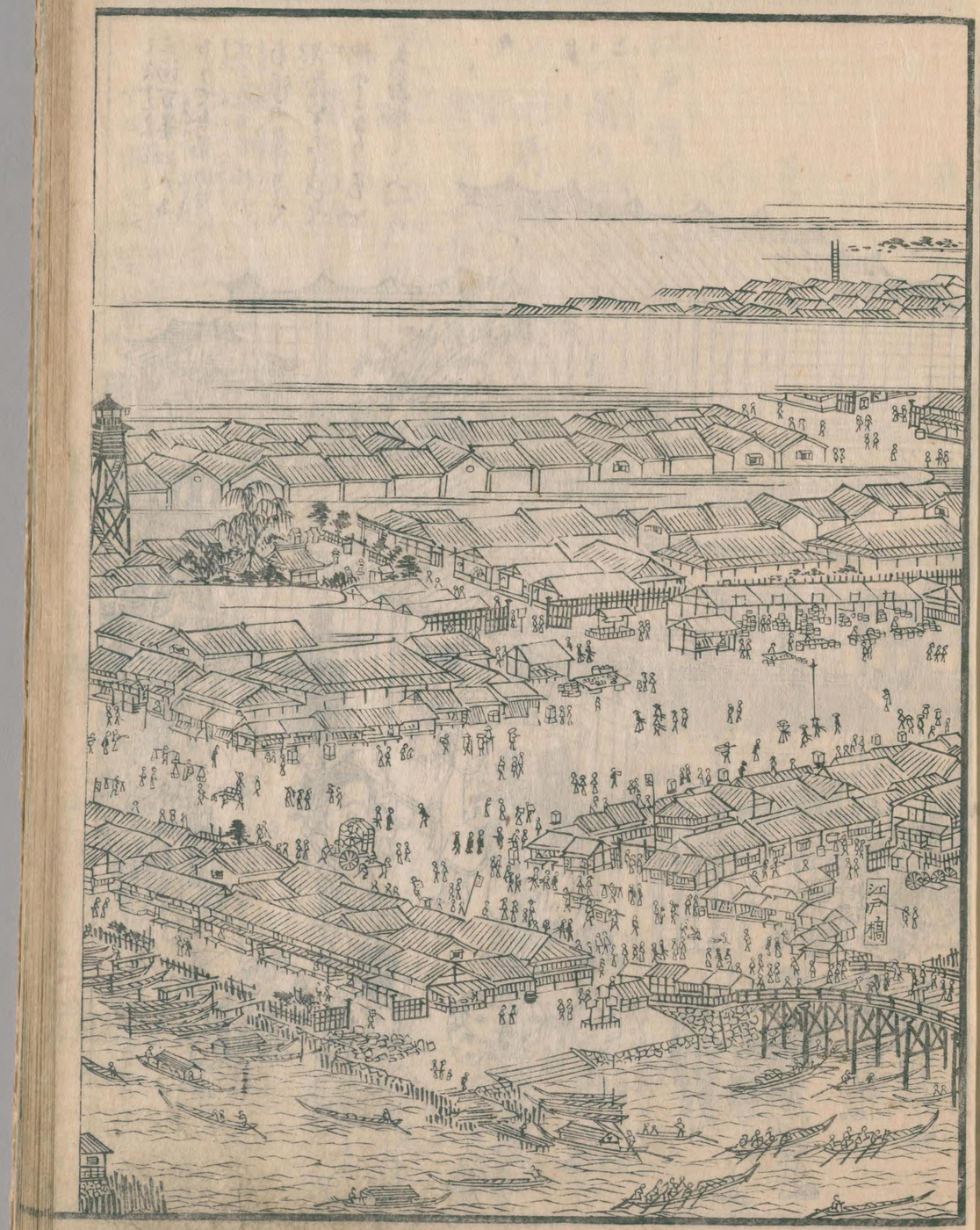


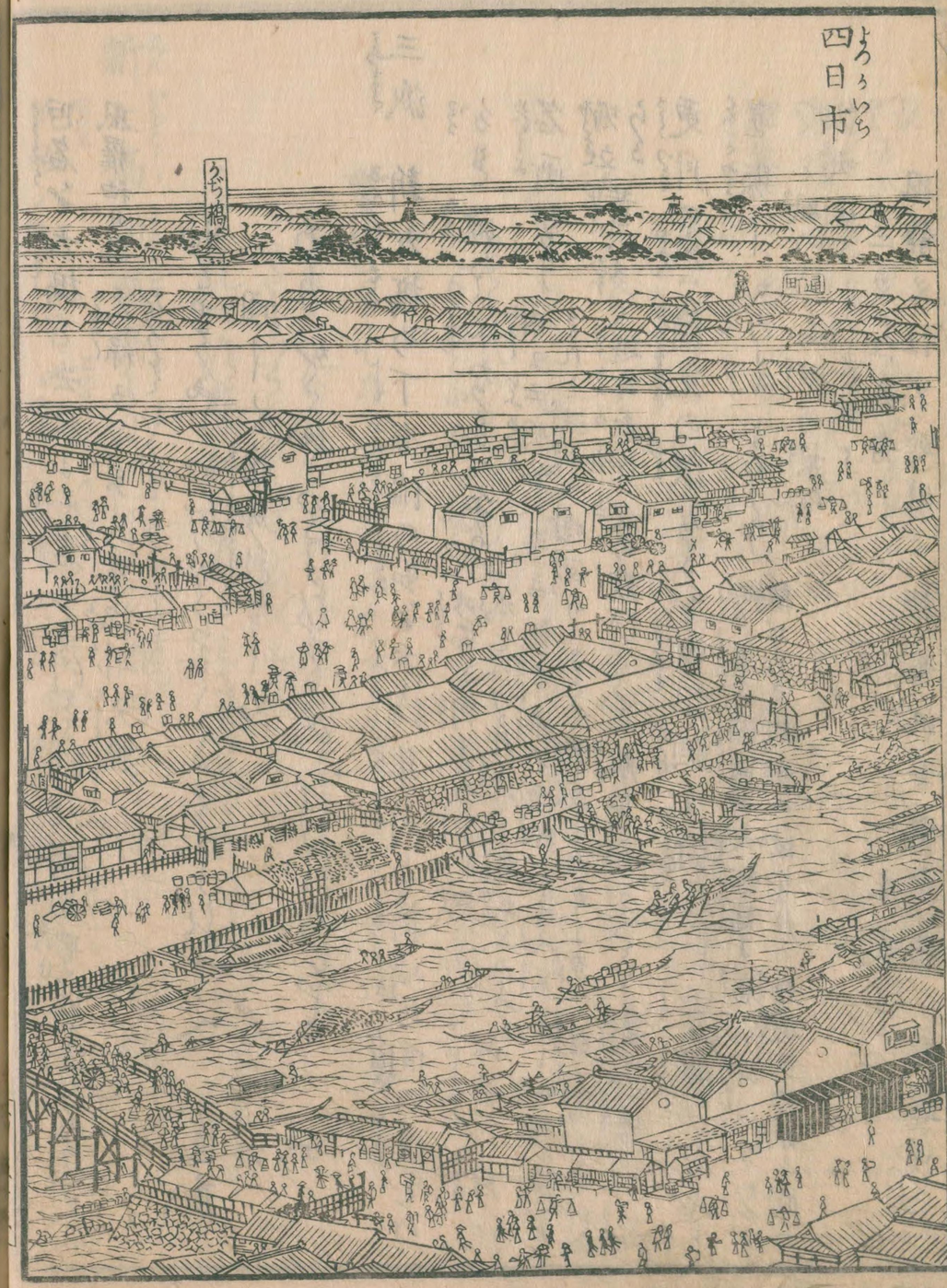
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

門に入て教を受世に其名を聞ゆる者本居宣長橘千蔭平
春海藤原宇万伎揖取魚彦及ひ倭文女等之
家集
まう暦十四年の秋濱まちといふ所へ家をうつしてく
庭を世へまたハ畑に沈くりて所もいさゝかたへなもれ
名をあらたゝぬといひて住そめたる九月十三夜に月あそん
とて老たしき人へつとひて家よりたるついてによめる
こほろきれ嶋やあらたの家宿に月かけ清しとふ人もあれ
あかたゝぬのちぬの霧原かきまけて月ゑんにきりける都人かも
こまゝ氏のことゝより嵐の船とゝひて地にしたる
かへりことに夜へ吹ちらしたる屋根板にこのきたく
やまぬ
聖いきしてあらたれ宿ハあれにかり月ゑんにこゝと注に告まし
ここゝ紀のまつりていく女の君れたしたるに庭を
たゝまつられるうすれのを咲たりたるかし
春されハ鶯葉を咲あらたゝに君来まさんと思ひうけきや

新大橋 両國橋より川下の方濱町より深川六間堀へ架す長
凡百八間あり此橋ハ元禄六年癸酉始て是をかけ給ふ両國橋の
旧名を大橋と云故に其名によりて新大橋と号らるゝとなり
風羅袖日記 元禄五申年の冬深川大橋
なりたかられたるとき
初しぐるやかけかゝりたるたしかうへ 芭蕉
同しく橋成就せし時
あかかたやいたひく路はしのとも 仝

三派 新大橋の下分流の所を云浅草川と箱崎の間の流との
分れ流るゝ所なれハ分り 此所を別もの淵と云ハ汐と水とのわかれ流るゝ所なれハ此所ハ月れ
名所なり 因に云明和八年辛卯中流を堙埋しく人居とし中洲と称せり
堀立 昔ハ多く遊女奇舞妓の類ひこゝに船をうかへて宴を催し殊
更月の夕ハ清光の隈なきを翫ひ酒に對して奇諷ひなんと
甚賑しかりしとなり 江戸雀に諸國の大船殊に唐船此川にかゝる
つゝ風のさらに芦の葉の 隈なきに納涼の地なれハ船遊ひの船に波の
笛吹なりしと云々
三叉江泛舟 春臺
風静叉江不起波 輕舟汎々醉中過 天遊只





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

在人間外　長嘯高吟雜棹歌

人ゝにとはなかれたゝくハ月の十六夜三派に舞を
うかべて脱ん[illegible]たりしに[illegible]
年十六なりといへば
美しき人も二八の十六夜月をしつまたあるものでない　ト養
いもありまたゝもあり川もあり[illegible]ハひとぬたゝつまたも系　仝

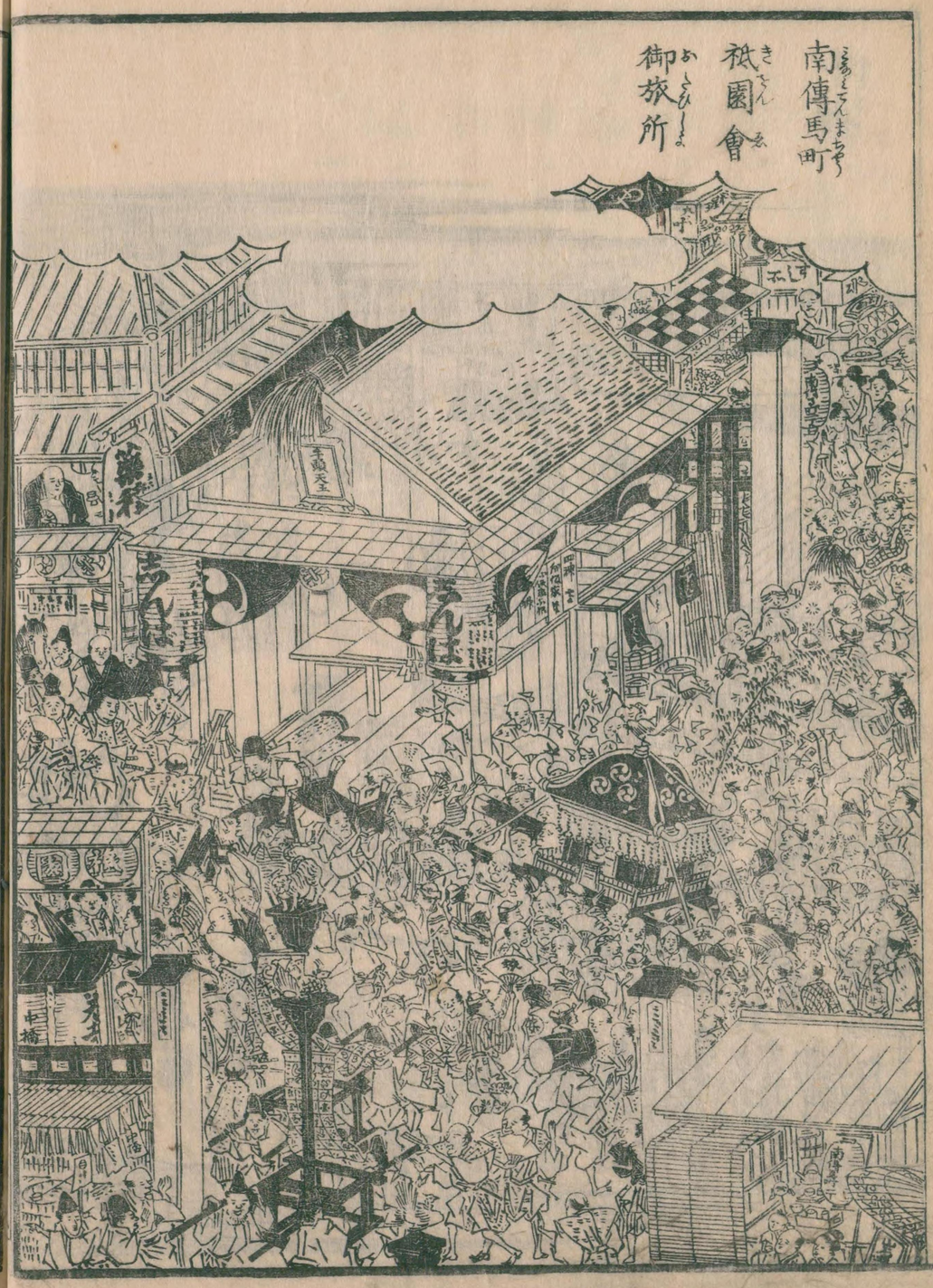
江戸橋　日本橋の東にありて伊勢町より本材木町へ行間に架ひ
南の橋詰巽の角に船宿あり江戸の内諸方への船場なり又
同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の
船ゝに集ふ故に名とす

四日市　江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市
場とのびし村にいゝしへハ今の繁華のめさるゝなるれハ萬の賈
衒も市をなしゝ交易せされハ得かたし故に而ゝに三日市を
立る區を名つけて某日市と云羽州のあたりにハ二日市と云より
十日市と云近區の名に清き交易せり此地も昔ハ毎月四の日に

中橋

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

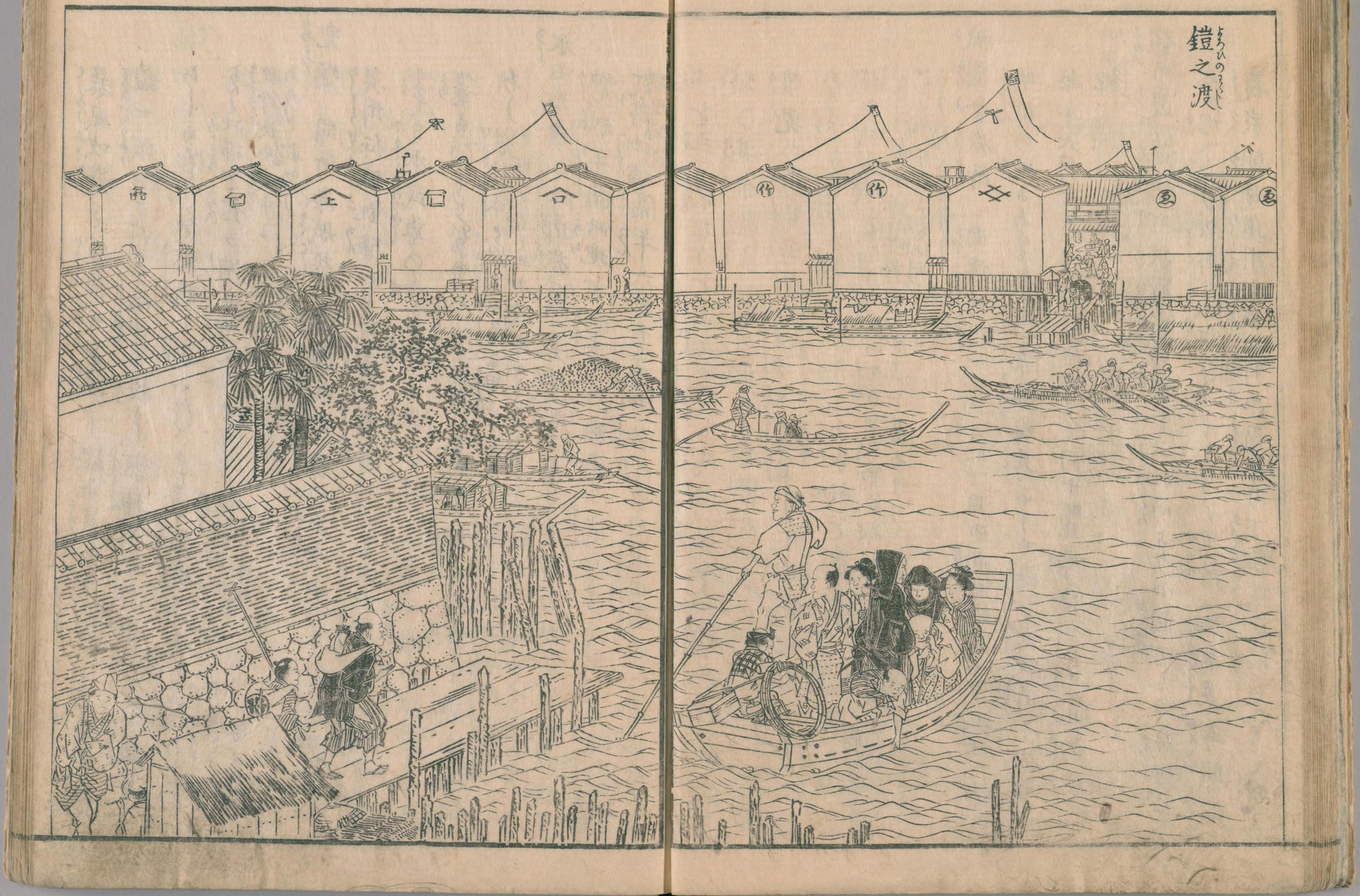


市を立しなりとそ故に今も其遺風にて草物又ハ野菜の類ひ其余乾魚などの市ありて繁昌の地なり此地に根津権現の御旅所あり 正徳年中に造営ありとそ 同所河岸に傍て封疆藏あり下より石を以て畳揚上に家根を覆ふ 明暦開板のむさしあふ 橋の南萬町より四日市迄の町屋を取除け高さ四間に川端にしてくる草紙に日本北をうけ東西二町半に土手藏を畳あけらると云々今灵岸島に四日市と云る町家あるゝ此所より引こゝるなり

祇園會旅所 南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻にあり本社ハ神田明神の地にあり祭所素盞嗚尊にして是を大政所と称せり毎年六月七日こゝに神幸ありて同十四日帰輿しなる其間参詣多く甚にぎはへり

鎧の渡 茅場町牧野家の後を云此所より小網町への舟渡をしゝ唱へたり往古ハ大江なりしとなり里諺に云永兼年間源義家朝臣奥州征伐の時此所より下總國に渡らんとそ時に

鎧之渡（よろひのわたし）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

暴風吹發して逆浪天を浸し既に其船覆らんとせ義家朝臣
鎧一領をとりて海中に投し龍神に手向て風波の難なら
らしめむるを祈請せ遂に清らかなく下總國に着岸あるし
より此所を鎧ヶ淵と呼へりとなり 元祿開板の江戸鹿子に平將門
此所に兜鎧を置兜ハ塚に築て
牧野侯の庭中に
ありと記せり

兜塚 同所海賊橋の東詰牧野家の庭中にあり源義家朝臣
奥州征伐凱陣のとき先の報賽のため且ハ東夷鎮護のあと
して日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き
篭もひしとなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮守小祠
あり 紫の一本といへる双帋に甲山とありて藤原秀郷平將門を討
首を冑と共に持添きたるしか冑をハ此地に埋めたるとあり

永田馬場山王御旅所 茅場町にあり遥拜の社二宇並ひ建て
寛永年間此地を山王の御旅所に定らるといへる 一宇ハ神主樹下氏持之
一宇ハ別當觀理院持之 隔年六月十五日御祭礼にて永田馬場の御本社より

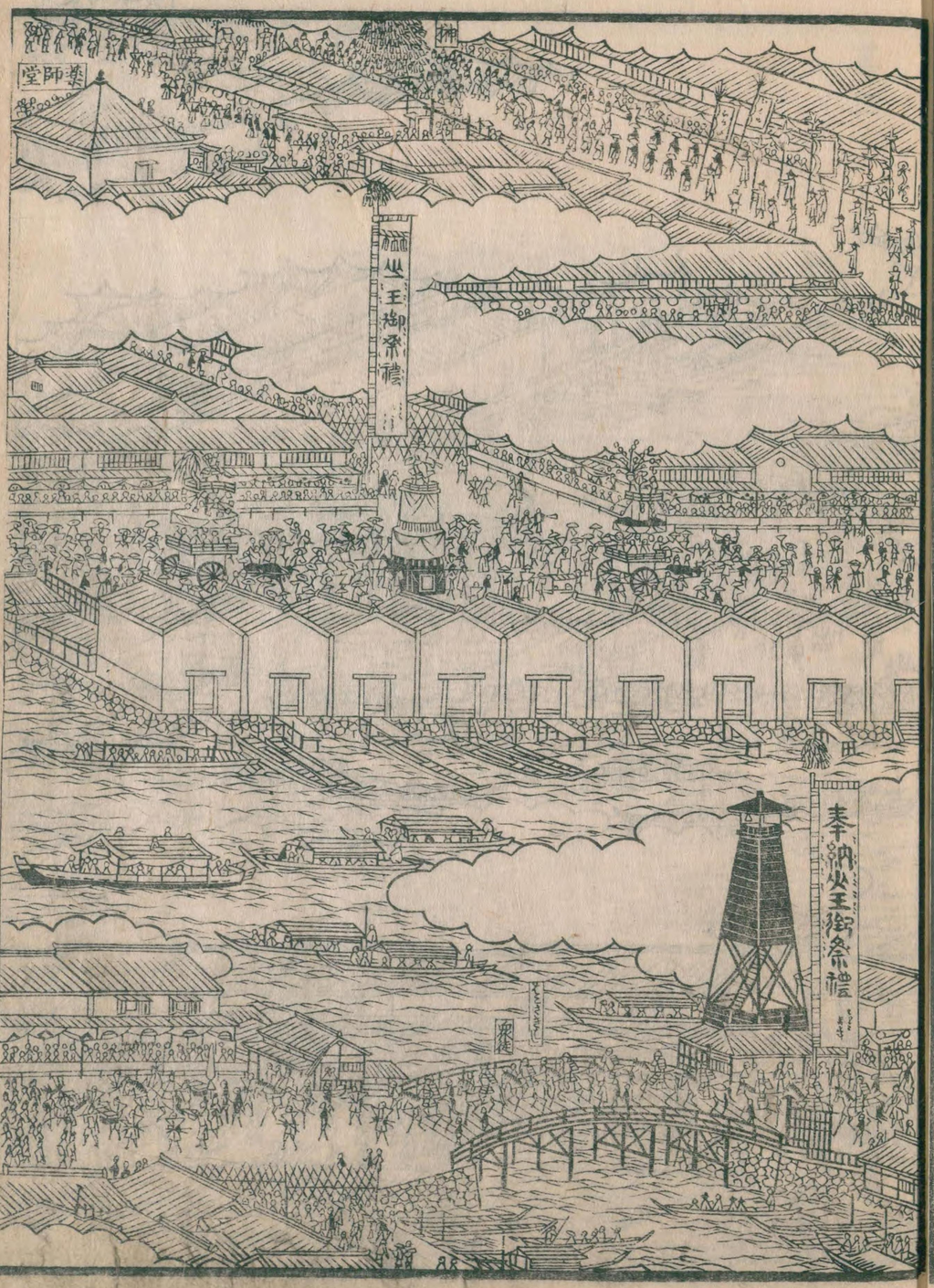
神輿三基此所に神幸あり假に神殿を儲け供御を献備し
別當ハ法樂を捧け神主ハ奉幣の式を行ひ夜に入て帰輿
なり其行裝榊大幣菅蓋錦蓋雲のめく社司社僧ハ騎馬に
跨て或ハ輿に乗し前後に扈從を諸侯よりハ神馬長柄鎗
等を出されて途中の供奉嚴重なり又氏子の町々よりハ思ひ〳〵に
練物あるひハ花屋臺車樂等に錦爛純子抔のまん幕を打
たへ各ゆ出立花やうに羅綾の袂錦繡の裔をしるへし粧ひ
巍々堂々として善美を尽せり 此日官府の御沙汰として
神輿通行の御道筋ハ横の小路々々ハ矢来を結ひ往
来を禁せらる実に大江戸第一の大祀にして一時の壮観なり

藥師堂 同く御旅所の地にあるも本尊藥師如来ハ惠心僧都の
作なり山王權現の本地佛たる故に慈眼大師勧請しなふ
といへるも縁日ハ毎月八日十二日 正五九月昔ハ開帳あり にして門前二三町の間植木の

六月十五日
山王祭（さんのうまつり）

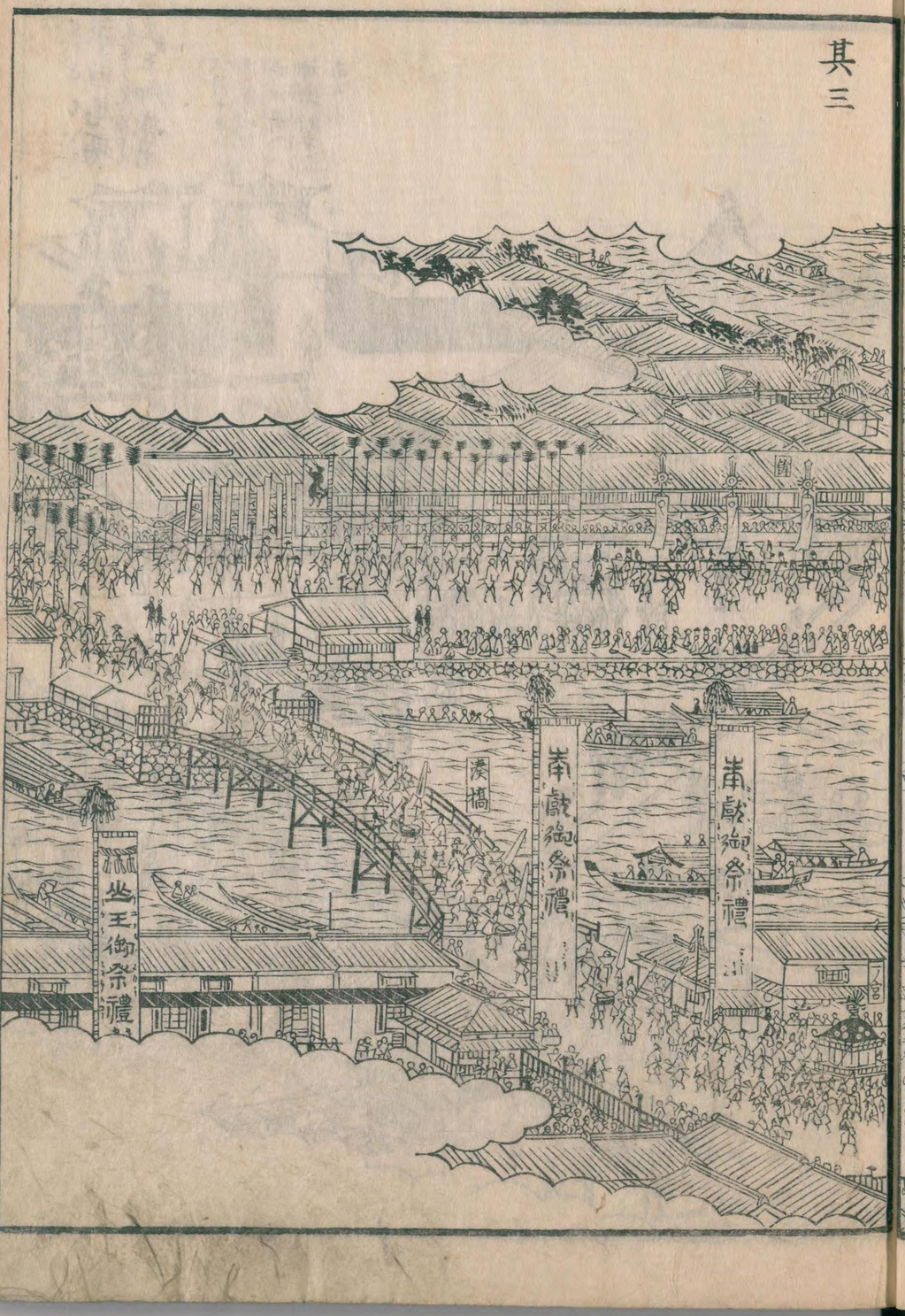
家ホまもる
天下
まつりや
亡車
其角

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

其三



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

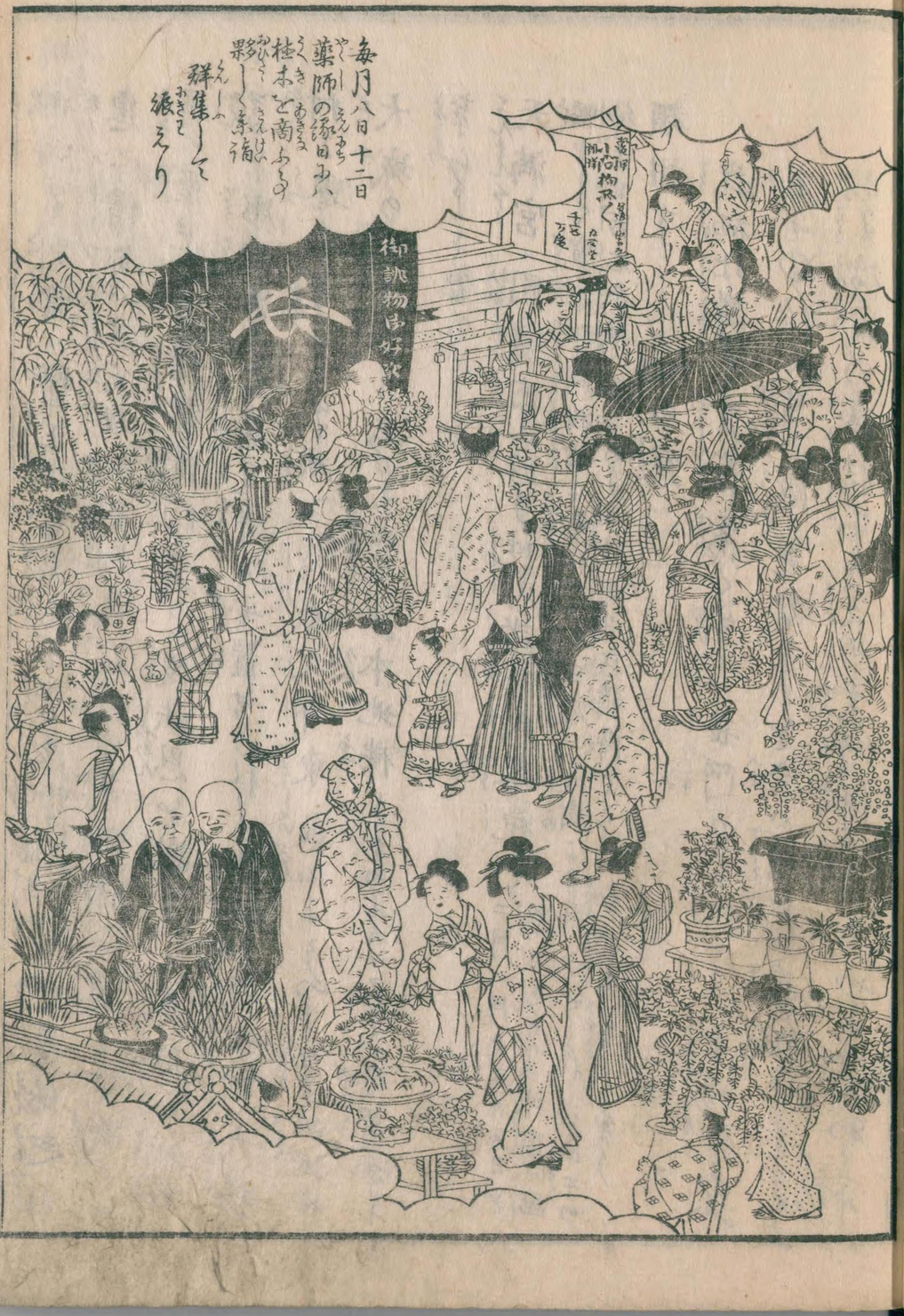
ガラス使用

永田馬場
山王御旅所

六月十五日
神幸祭礼の
時此所へ
神輿行幸
あり

茅場町
薬師堂

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

市立す別當ハ醫王山智泉院と号す元ハ鎧島山と本尊縁起曰
惠心僧都ハ其父母大和國高尾寺の菜師佛に禱まゝく設くる
所の靈児なり僧都佛門に入て後法恩を謝せんこと為自ら此本
尊を彫刻ありて高尾寺に安置せられしに遙の後相州大場
村に遷しまりたるも然に慈眼大師東叡山にうつしまる此地や
大城の東に位しまつも山王此本地佛たるにより此に安置なし
まらるゝとなり

天満宮 同境内にあり社司諸井氏奉祀す二月八月共に廿五日を祭日とせり神像ハ画幅中にて寛永年間柳営に奉仕の春日局大樹より拜受せられしを山王の神主日吉右京進へ附与あり其後諸井氏請得てこゝに勧請なしまるとなり

類柑子 北の窓

我栖北隣に芦荻萬く生て笹阿なる地あり茅場町といふ
名に如れて背ハ海邊なりしを今ハ菜師佛立ちにかゝる堂のかゝ年
たゝほのかに絵にかゝるとゝんゆ[illegible]
深く引人しなられハ蓼の[illegible]穂に立のこしまりて第木
色つきけるに風につけても虫の[illegible]大[illegible]
[illegible]なるに待にかなりしに出る月うれとことなりし
[illegible]中略 [illegible]
[illegible]
なし娘の[illegible]
とすあやまちを[illegible]
[illegible]下略

俳仙宝晋齋其角翁宿 茅場町菜師堂の辺也といへ[illegible]元禄の
末こゝに住す即終焉の地なり
按に[illegible]句ハ其角翁の[illegible]
[illegible]
祖徠先生居宅地 同所植木店なりといふ先生一号を護園といへれし

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

蔭ハ萱と同し字義あるとハ称せられしより此地よ住せられしより知る

伊雑太神宮　北八町堀松屋橋より一町そる艮の方塗師町代地町屋の間よあり　當社あるを以此所を字土俗磯辺太神宮といへども磯辺横町と呼へきにあらす

伊雑の御神ハ天照皇太神宮の別宮ゆゑ祭神ハ伊佐波登美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口市正某伊雑宮より移し奉る通三丁目よ宮社を営めり

今神明長屋と唱ふハ則是なり　同十年癸酉今の地へ移し奉るより例祭を六月廿六日よ修行を

三ツ橋　一ツ所よ橋を三所架せし　左ふ右ふ町八丁目へ渡るを彈正橋と呼ひ（覚永の頃今の松屋町の角よ島田彈正火矩やしきありし方とそ）村木町より白魚屋舗へ渡るを牛の草橋とそ又白魚屋敷より南八町堀へ架るを真福寺橋と号くなり

北八町堀より本村水町ニ丁あり

霊巌島　箱崎の南よあり　町数今十八町昔雄誉霊巌和尚此地の海汀を築立て梵宮を営く霊巌寺と号く（依て後世霊巌島とそ地名起る）初ハ江戸の中島とよひしとかや東海道名所記よまつのん島も江戸の内と云云東の海中へ築出しゝ島なりとそ

されく手狭を町家となしゝかゝるを以故よ此地の北の通りより茅場町へ渡る橋を霊岸橋と号けくり

随見屋舗　同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありといへとも此所よ瀬戸物屋多く住せり故よ茶碗鉢店とも号く或随見長屋ともよへり

川村随見ハ諸國の水土を考へるふ精しゝて大よ世よ勲功ある人なり

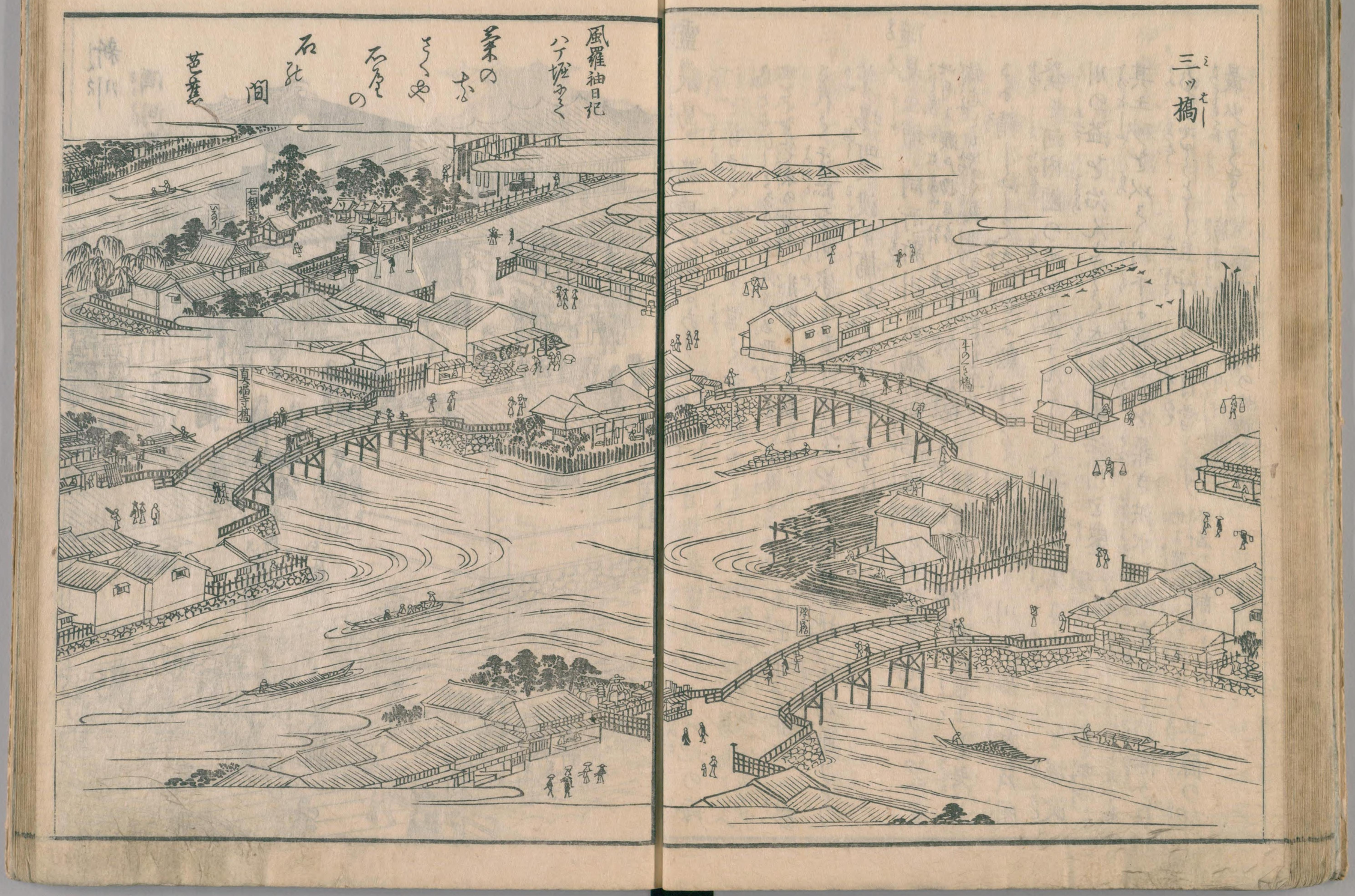
堀田畑我開さんとして摂泉の堺よ大和川を堀淀川の溢を治んとして大坂よ安治川を鑿（随見自らの実名を安治と呼ふ音よ呼く安治川と云とそ）其土砂を以て川下よ新よ山を築き洪水の時高波を防除るゝをもとより旦沖よりの目當とす

最少くそ

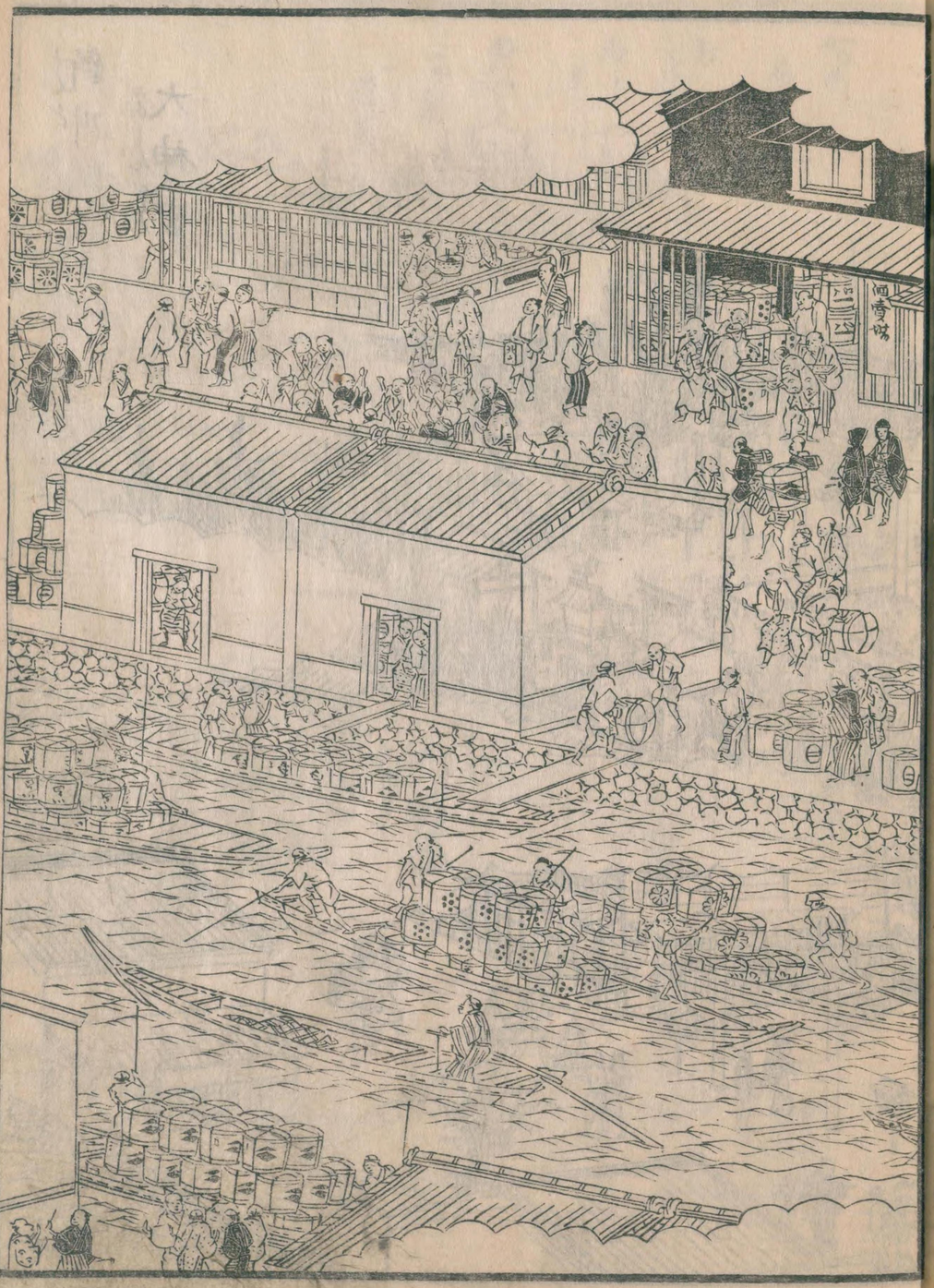
幕下川村氏の始祖ありと云

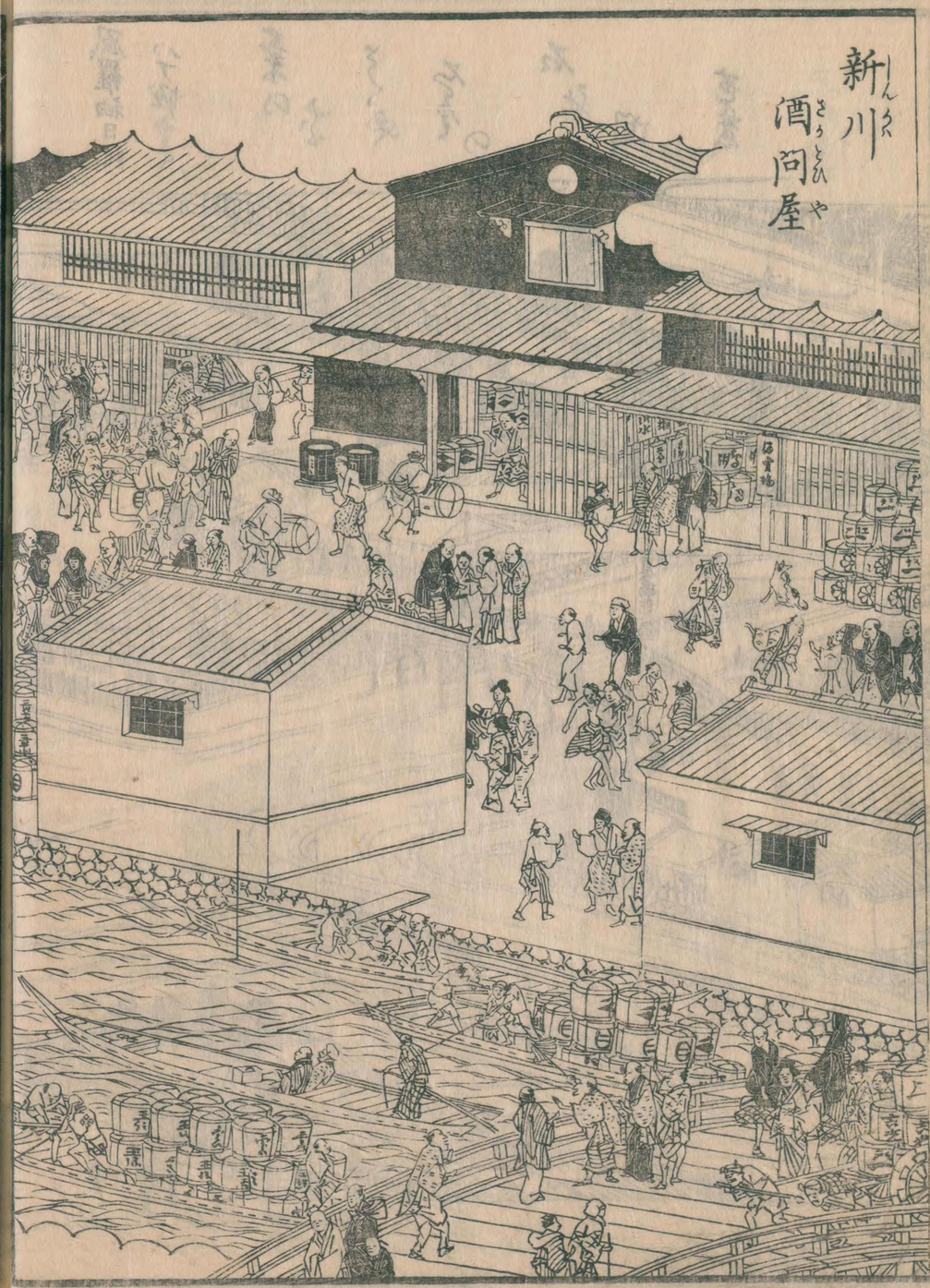
菊岡沾涼云く川村随見ハ本名ハ波除山といへり　其餘の功

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用





新川酒問屋

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

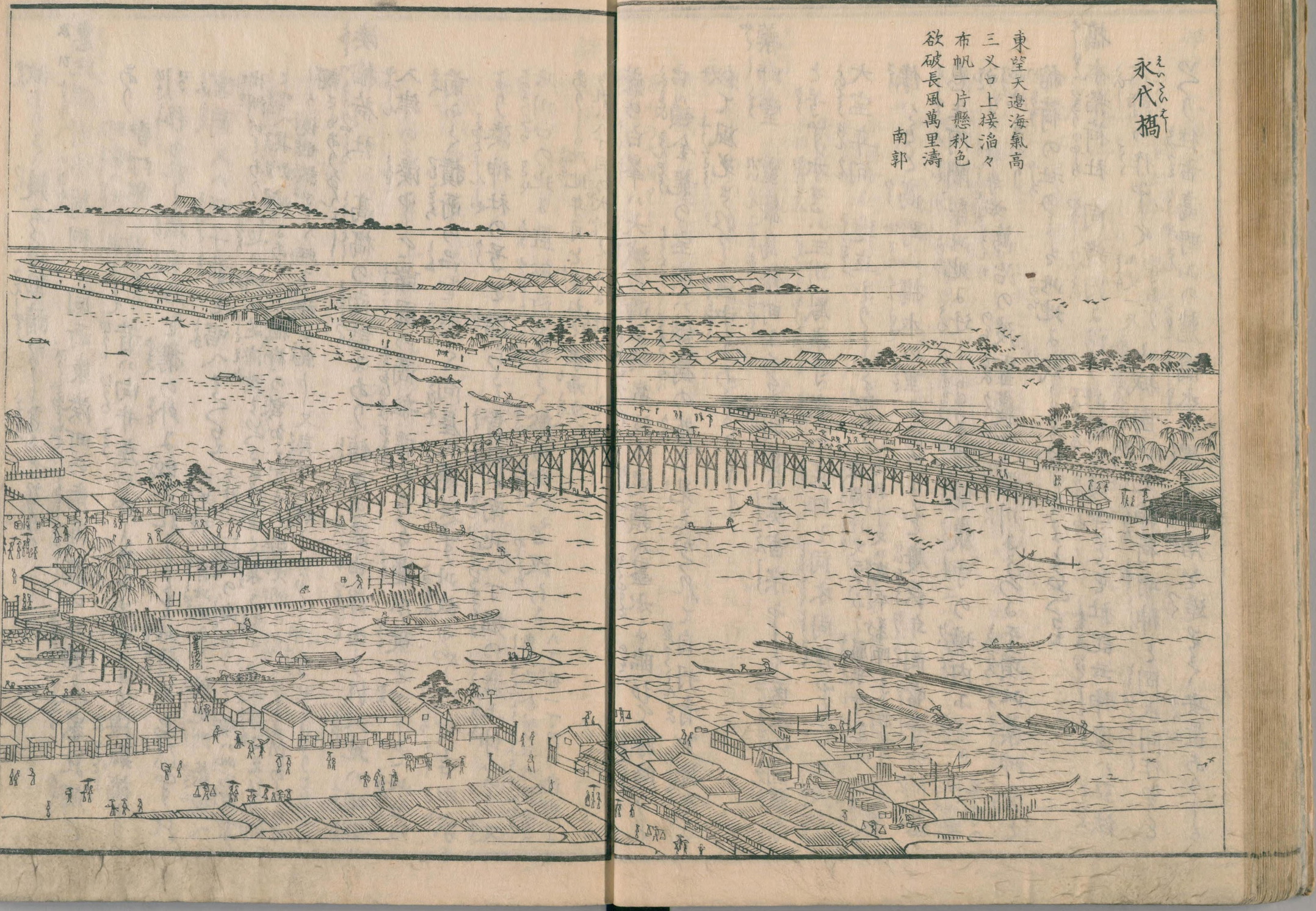
伊勢太神宮　同所四日市町よりあり此地の産土神とも
繁昌の地なり　伊勢内外両皇太神宮を勧請しまつり遥拝所とも
宮伊勢と同年なり　江戸鹿子よハ寛永中草創とあれど
丘尼江戸恭府の折柄旅亭の儀の為よ此地をもふとも
御門跡並ひ比せられ紫衣を賜りより御門跡並ひ比せられ紫衣を賜りより
今も彼寺の住持比丘尼ハ代々この家より嗣
按よ明暦の江戸炎圖よ今呼謂三の浦
此上人の旅宿なるべし後ハ此地よ伊勢上人の屋舗ともなりしまあり
年山紀聞云
永禄元年日記不詳　後の六月三日中山亜相神官の勘奏　彼於云去月廿三日神官評
上棟無之　今沙汰之　注進有之　側聞之
慶光院　以諸國勧進　力一此上棟取り立可著心内　又内宮・上棟存立云云　雖
不相應　未世の此儀依神忌有子細
永代橋　箱崎より深川佐賀町よ掛る元禄十一年戊寅始て是を
架せらる永代島よ架よ名とす長凡百十間餘あり
諸國への廻船輻湊の要津なり　此橋のかゝらぬ前ハ
深川の大渡船　東南ハ蒼海ゆゝしく房総の翠巒斜よ開き美
碧の白峯ハ大城の西よ峙ち波の遠嶺ハ墨水よ臨むで朦朧たる
白嶺金龍の宝閣ハ緑樹の蔭よ見えかくれて自丹青を施せるよ
似て風光さらく画中よあるごとし
薬師堂　霊巌島銀町よあり別當ハ真言宗ゆゝしく医王山圓覚寺
と号す本尊ハ三州鳳来寺峯の茱萸師と同木同作ゆゝして
大宝年間よ造立ありしまあり　座像丈三尺あり
像ハもと高野山橋本の里よ
恵生阿闍梨此地よ迁しまつりを後霊巌寺の境内よ安置
慶長年間當寺の開基
稲荷の社のみ此地よ残しまつりを
橋本稲荷社　同境内よひとり此所の鎮守とも社記云神像ハ弘法
大師の作ゆゝして　二寸あり　丈一尺　山城國伏見稲荷明神と同木同作ありと
ひとり往古高野山の麓橋本の里よ宮居を造りしまく安置ありしら

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

永代橋

東望天邊海氣高
三叉口上接滄々
布帆一片懸秋色
欲破長風萬里濤

南郭



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

故ありて後こゝに勧請なりし
恵比須前稲荷祠　同所東湊町の南高橋の北詰人家社間にあり　別當八天台宗ゆゑて昔ハ向井庚の普門院と号す
移られし頃宮居を構の外より出されしとて此所を忌ひすて宮前又ハ蛭子前と唱へさるも古老云く昔此地より鍛冶洲築地へ出洲のあり此辺の洲を芝海老と唱へ其洲崎よりありし稲荷の宮を海老洲の宮とのこよひあるつゐて海老洲の多く集る故ふ漁人字をえひの洲と誤さもありしなん後世蛭子神を混し又夷子を祝しいつく附會せしありしそこの
湊稲荷社　高橋の南詰よあり鎮座の来由詳ならす此地ハ廻船入津の湊ゆゑ諸國の商舩普くこゝふ運ひ碇を下して此社の前ゆく積所の品を悉く問屋へ運送す此故ゆや近世吉田家より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又此川口の北よ監舩所ありく舩の出入を改らる　事跡合考云此祠昔ハ八丁堀一丁目の南岸よありしを此地年月を重ねく家居立つゝきさりしより此洲と記せり　今ハ薪炭石灰の問屋多くく住せり

鍛冶炮洲　南北へ凡八町もあるへし　傳云寛永の頃井上稲富ホ大尚の町見を試しおなりと或此洲の形状其器よ似くる故の号ありともいふ　白石先生の説よ此地ハ明暦火災後ホ築山伝奏傷某を奉行として築かさりし家居立つゝきさりしより又故家珍蔵の書圖ホ新洲と記せり

半井ト養翁居宅地　同所明石町の裏通りあり　敷ハ父ト養の時賜りと云云寛文江戸絵圖ホ十間町の西の裏通り寒さ橋の東詰の北の方川よ傍る角よ記してあり

東都の医官ホくて牡丹花肖柏の裔孫なり　連哥あるひ狂歌を能せる此地を賜りしより頃の口ゝそ

半井ト養

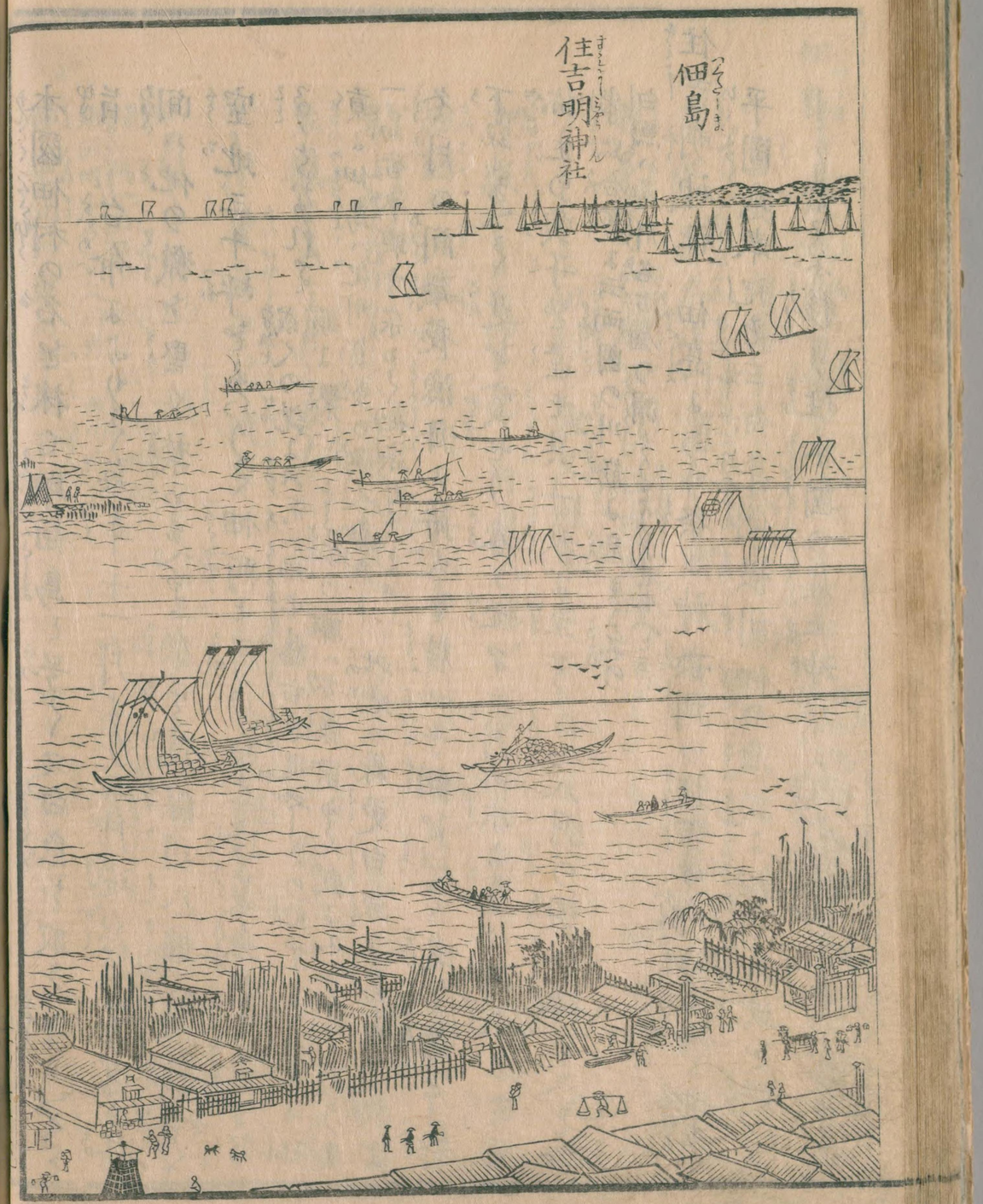
半井ト養翁ハ本道ゝそ思ひしよりよく外科ゟ兼ゐ按ふ江戸砂子ふト養の詠るゟ如く不審ゟ晴れも哥意ハ他の人の詠るゟ如く不審ゟ晴れ

了然禅尼菴室地　此地よ住くしよし紫の一本とゝる草紙よ禅尼の行實ハ第四巻落合泰雲寺の条下よ詳なり

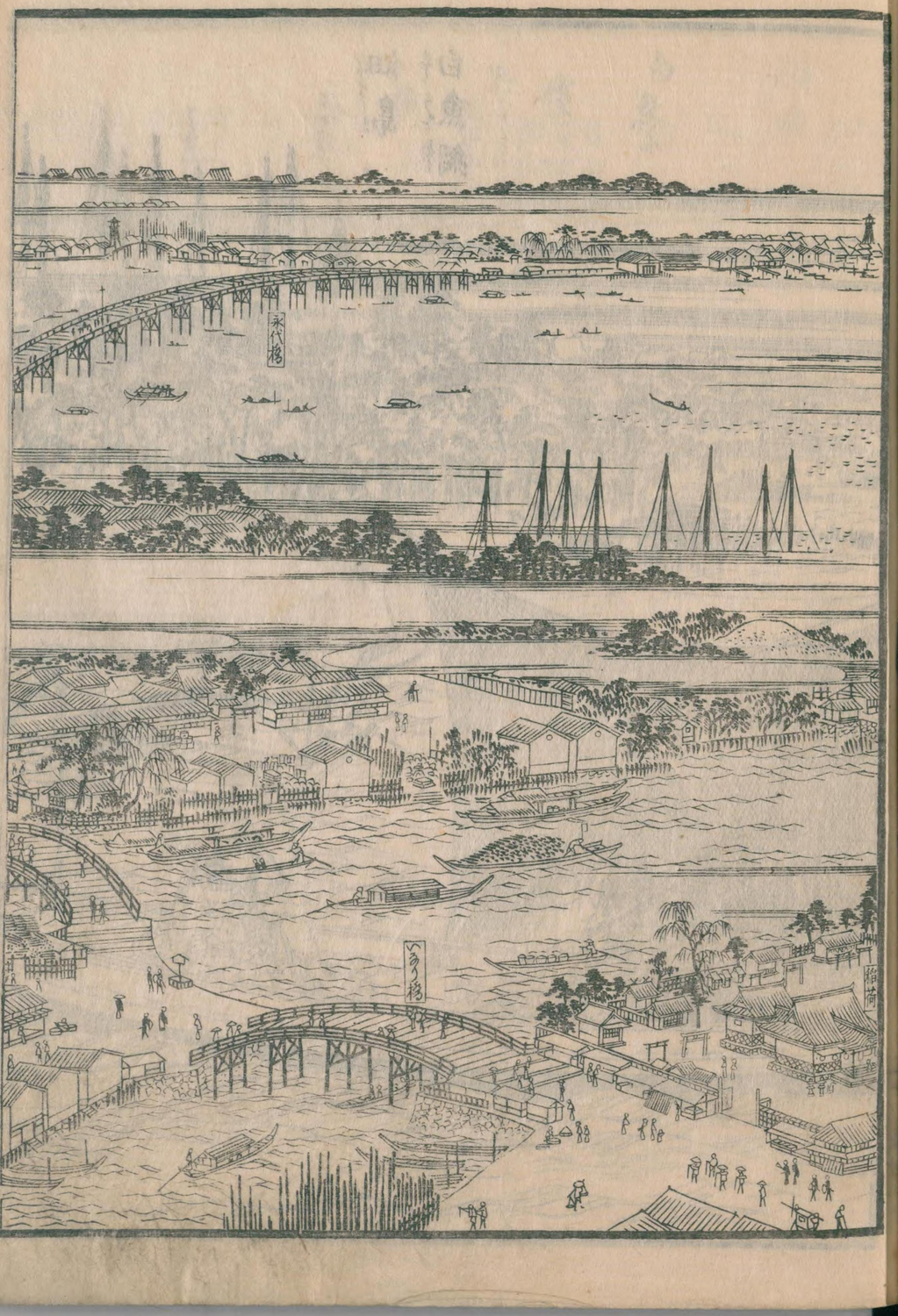
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

佃島　鍊炮洲に傍たる孤島をいふ舟松町より舟渡ありてこゝに至る文亀年間江戸の舊國に向島とあり天正年間東照大神君遠州濱松の御城にましく皇都へ上りなる頃摂津國多田の御廟ゆゑ住吉大神にまうてなるとき神崎川御船なりしに佃村の漁父獵船をこゝ出して渡しなりしかハ伏見御城にまし給ふ時も御膳の魚をなるべき旨　台命あり又西國へ御使なとの折からハかならず漁船を以て仕へなるべき旨　命ありしかハ大坂両度の御陣にも軍吏の密使或ハ御膳の魚獵なるのゝ日々怠なく仕へなりしかハ其後漁人三十四人江戸へめされ慶長年間浅草川御遊獵の時網を引せなひ同十八年八月十日海川漁獵なべき旨免許なしなへり其頃迄ハ安藤石川両侯の藩邸ありし頃ハ今の小石川網干坂小網町難波町ホに旅宿して居たりしとあり難波町に今も六人川岸と云所ありて六人網と号けて然に寛永年間鍊炮洲の東の干潟百間四方の地をなり正保元年二月漁家を立並へて本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取てなるべき旨　台命によりて毎年十一月より三月迄怠らずなる其間ハ他の獵を堅く禁めなへる猶其後深川八幡宮の前にて空地三千坪をなりて佃町と号けられ御菜魚をもなるとなれる或人の説に此所ハ始安藤右京進やしきの地にして住吉の社頭に繁茂するの藤ハ安藤家にて栽るなりといへり廣貢に佃島ハ紀州賀多の漁人雜居し一島皆本願寺宗にて他宗なしと云々此地ハ殊更白魚に名あり故に冬月の間毎夜漁舟に篝火を焼四手網を以て是を漁ひ都下ゆるべく是を賞せり春に至る二月の末よりハ川上に登る弥生の頃子を産む其子秋に至るべく七八月の頃江海に入と云事跡合考に云両國の川筋に産するの白魚ハ尾州名古屋の浦よりとりよせなふと云々

住吉明神社　佃島にあり祭る神摂州の住吉の御神に同し神主ハ平岡氏奉祀す正保年間摂州佃の漁民に初て此地を賜ひしよりこゝに移り住本國の産土神なるゆゑに分社してこゝにも



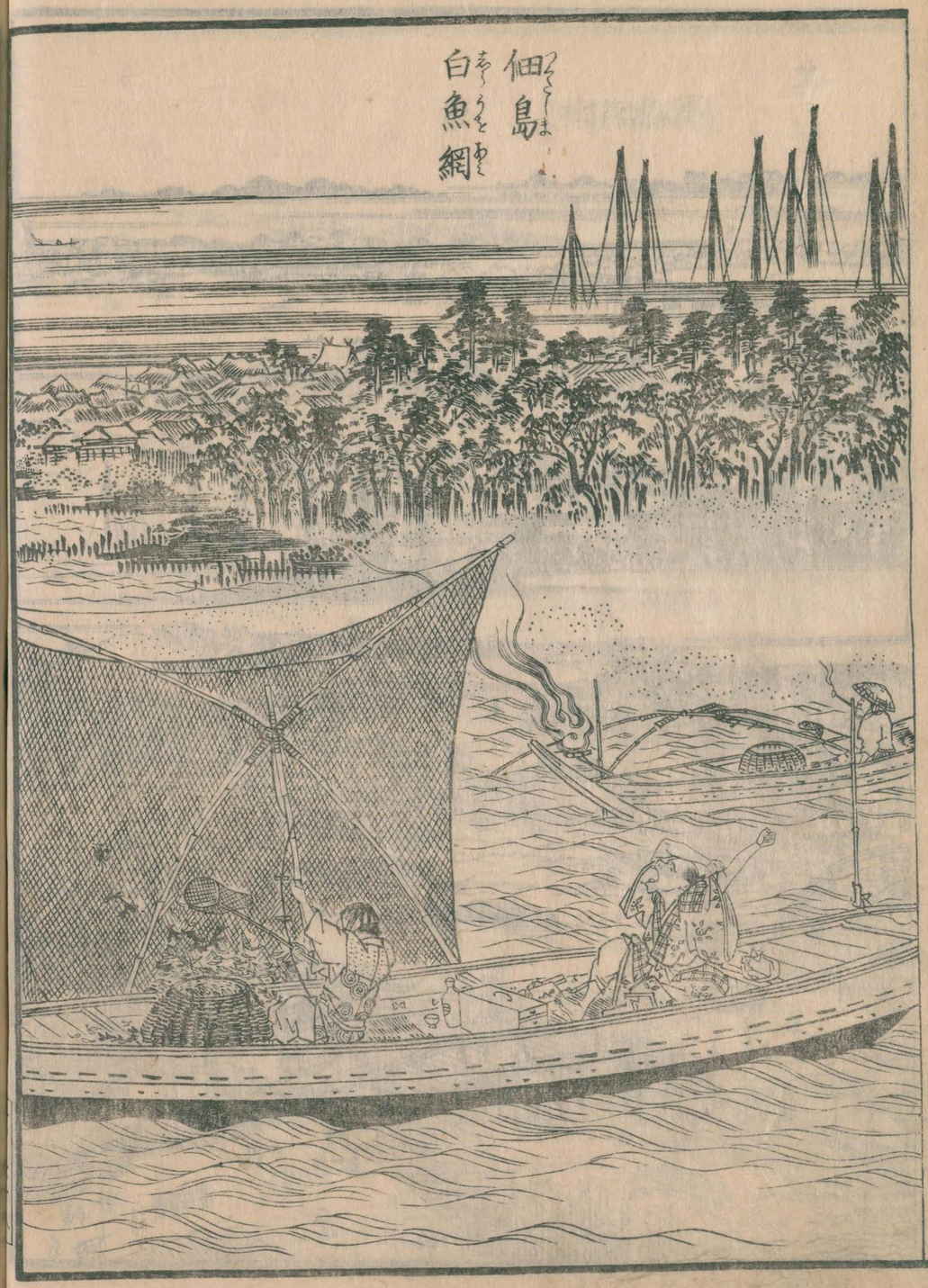
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

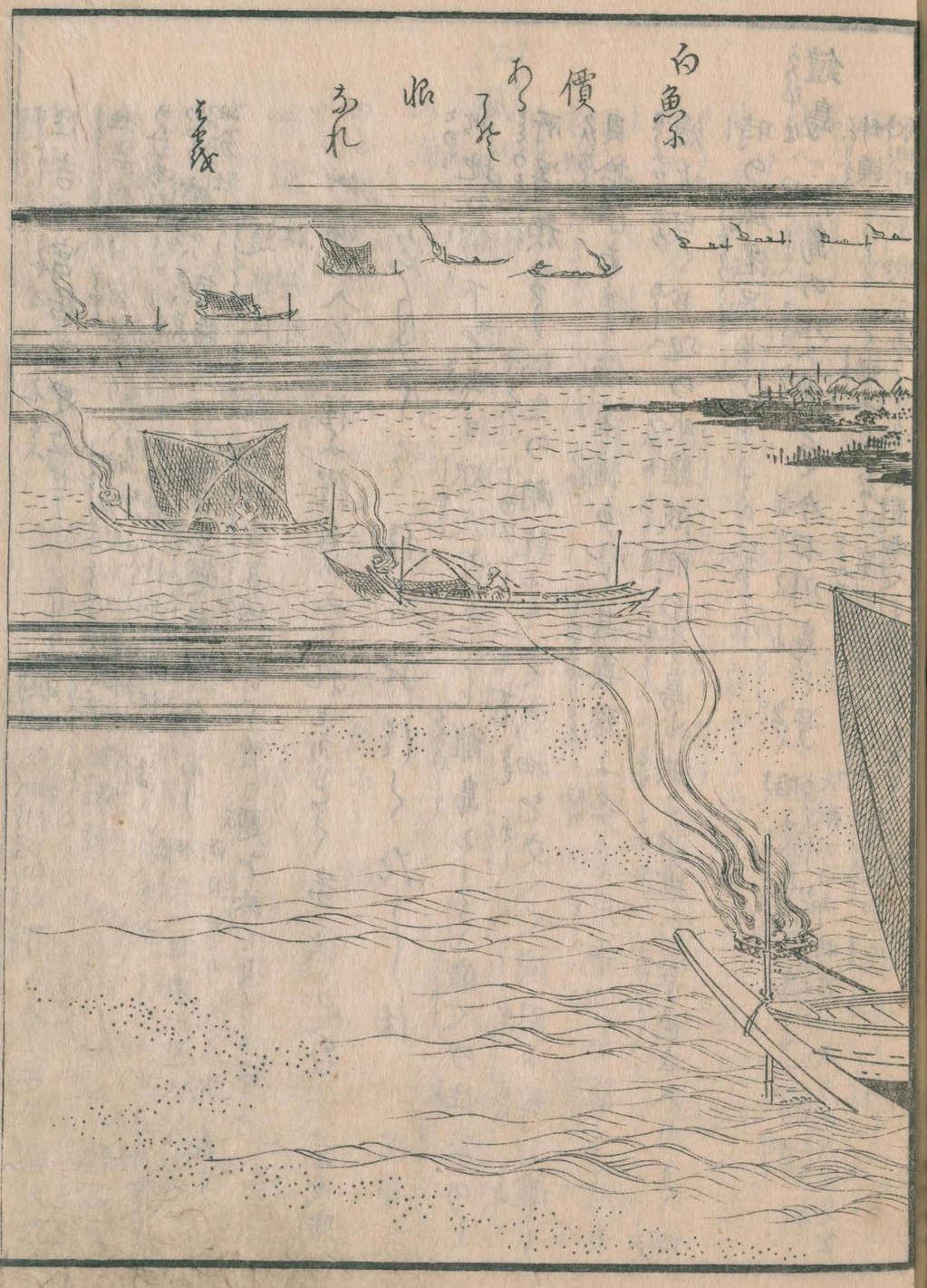


其二
湊稲荷社
佃形地
富士

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

佃島
白魚網





白魚
價
出
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

住吉の宮居を建立せしとなり　摂州の佃村ハ西成郡にあり古今集にたみの島とよめるもの是なりかしこにも住吉明神の宮居ありて神功皇后三韓征伐御帰陣の時其地に御船の艫綱をうけのひしより已降佃村の地に御船の鬼板を供へいつき祭る事千有余年なりといへり当社ハ毎歳六月晦日名越祓修行あり　例祭ハ毎歳六月廿八日廿九日両日なり人々群集す　此分社なり

逍遥院実隆公住吉に納和哥十首の題を詠てまつりし中に

江上月

此浦の入江の松に澄月のみなれそなれて幾秋かへぬ　富茂睦

名月やこゝ住吉の佃しま　其角

此地ハ都下を去る咫尺なれども離島なれハ漁人の住家のミ所得顔なり弥生の潮乾ふハ貴賤袖を交へて浦風に酔を醒し貝拾ひあるハ磯菜摘なんと其興殊に多し月平沙を照しては漁火白く芦辺の水鶏波間の千鳥も共に此地の景色に入りて四時の風光足ぬといふ事なし

鎧島

佃島の北に並へり今石川島と号く　俗にハ八左衛門殿島ともいへり昔大猷公の御時石川氏の先代此島を拝領せしよりかく唱ふとなり寛政四年石川氏永田町へ屋敷替ありしより炭置場人足寄場となれり　舊名を森島と云よし江戸の古図にハえんきより　文亀古図　又其図に記して云く此島一名を鎧島と号く古へ八幡太郎義家朝臣鎧を収めて神體とし八幡宮を勧請す石川大隅守居住の時ハ其庭中にありしか今ハ鉄炮洲稲荷境内にありと云云　或人云昔　大猷廟の御時異國より鎧一領を奉りけるに重くして是を持ものなかりし時石川氏の祖大力なりけれハ是を片手に持て　大樹の御前へ披露なし其御感賞のあまり此所を宅地にたまふとなり鎧を携へし賞としてたまはりの地なれハとて鎧島とハ号けらるゝとなり

江風山月楼

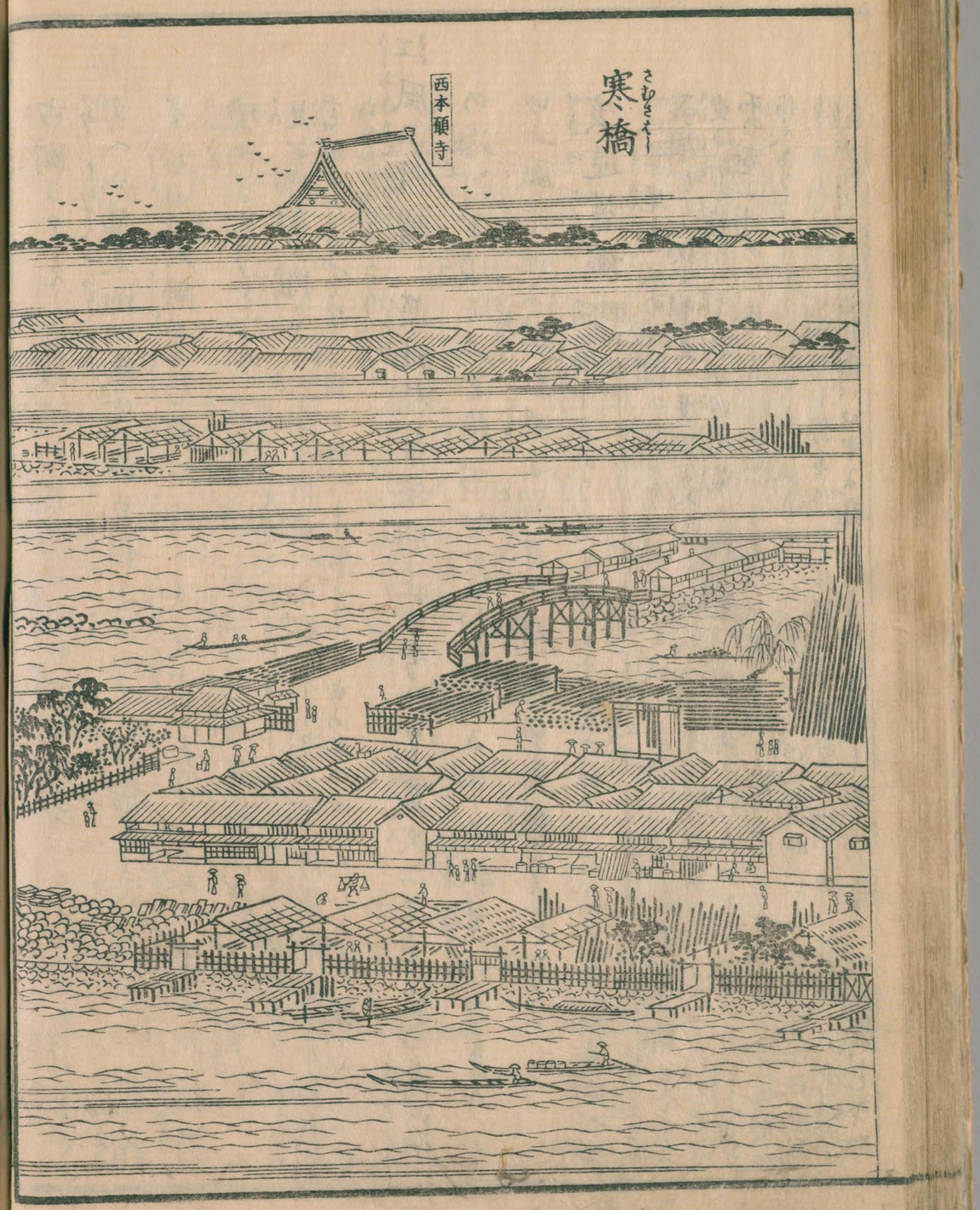
築地稲葉侯別荘の号なり寛文二年壬寅の春此所の海汀を填ミ土を積石を畳むて翌る年の秋其功なれりといふ風光他に勝れ殊に洞庭の秋影にも越たりとなり

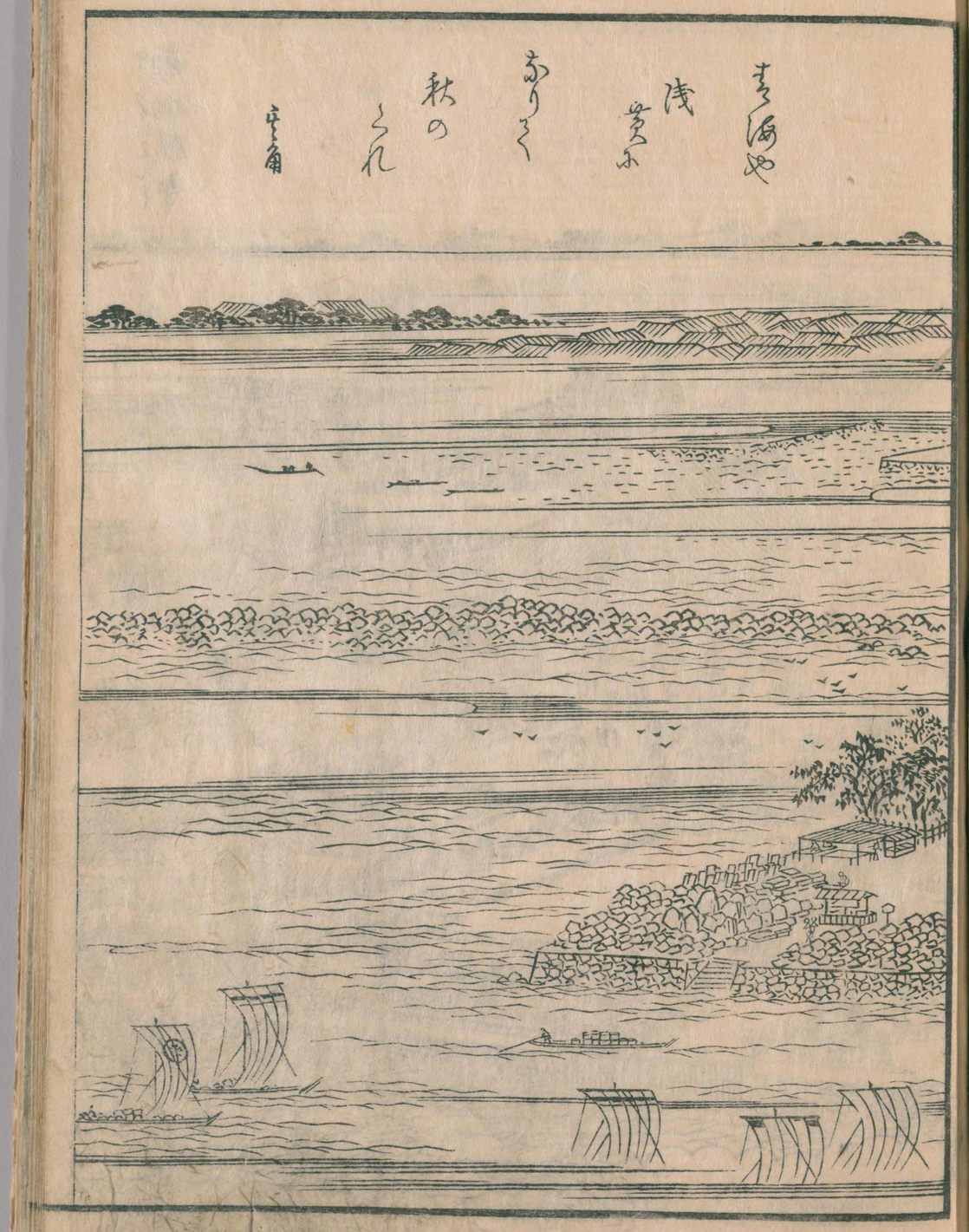
咳逆耆嫗

同藩中にありいつれもたかさ二尺ばかりの石像なり稲葉侯の始祖小田原にありし時其辺りを巡見せられしにとある深山にいたる一の草庵に一人の老僧の住るあり其号を風外と云後翁を城中に請せんとせる事数なり故に其後一度城に入来る城主見ゆることもあたはくひとせも受る所の種々ハ其家臣田崎某が許に置て出去終に行方をしらずとなり其住る所の庵に件の石像を残しありしを後此地にうつされたるとなりされと耆嫗とも何人なるかをしらずとぞ　伝云此耆嫗の石像を一雙並へ置時ハかならず耆の石像倒るゆへありとて依耆の石像を稲葉侯累代の牌堂に送し嫗の石像ハ稲荷社前に置となり又耆の石像ハ口中に病あるものの寄願し嫗の石像ハ咳を悩むもの祈

寒橋（さむさばし）

西本願寺

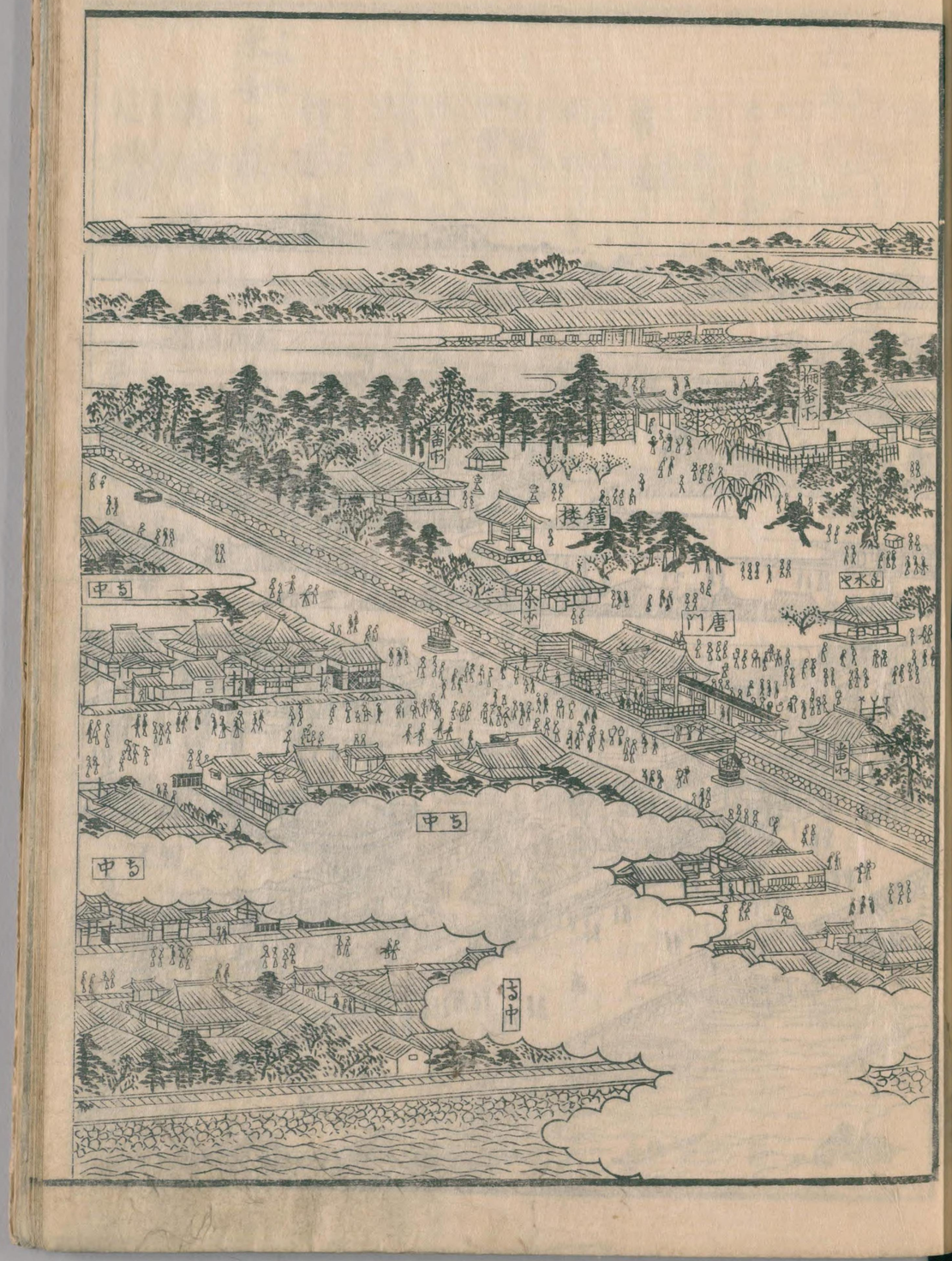


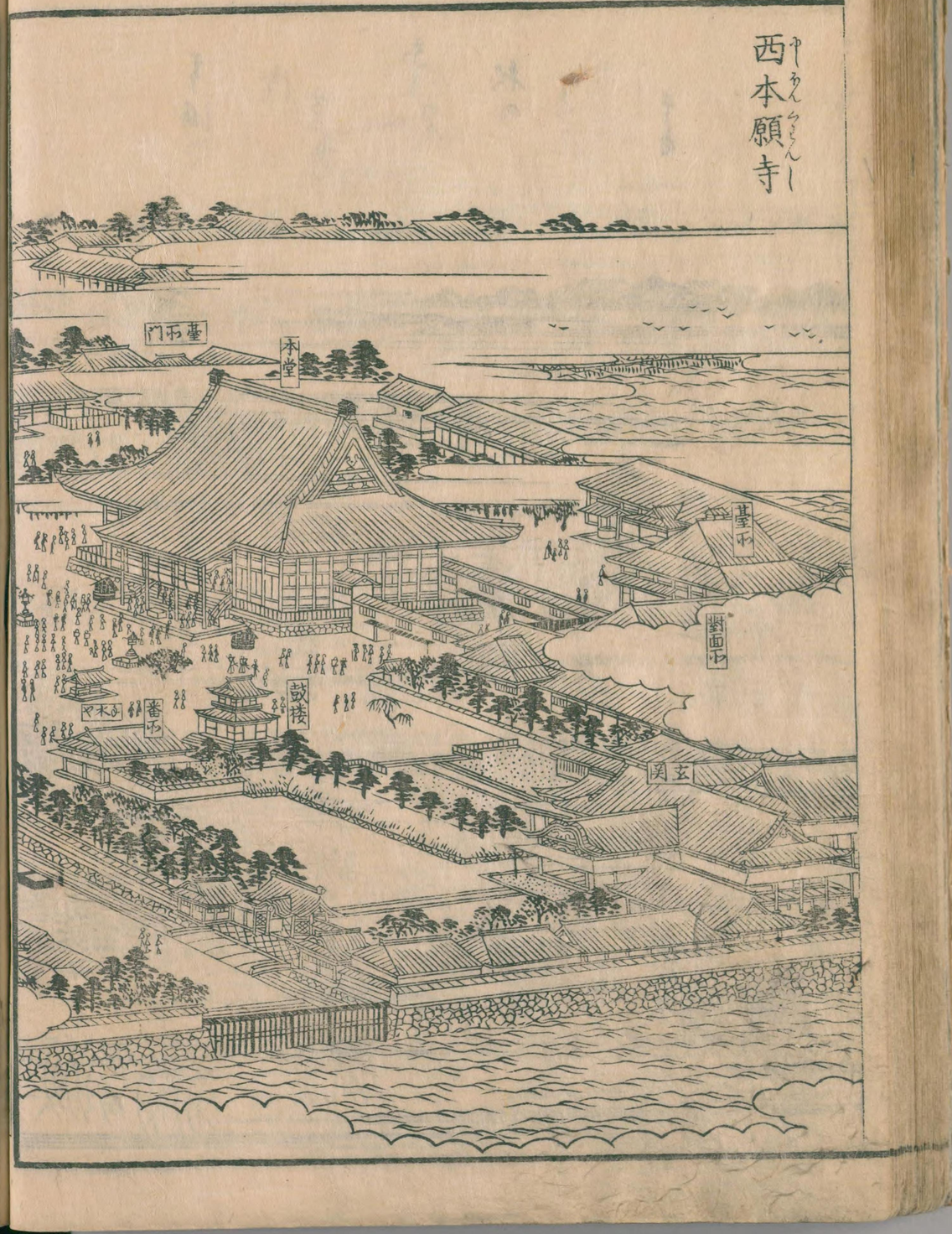


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

西本願寺（さいほんぐわんじ）





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

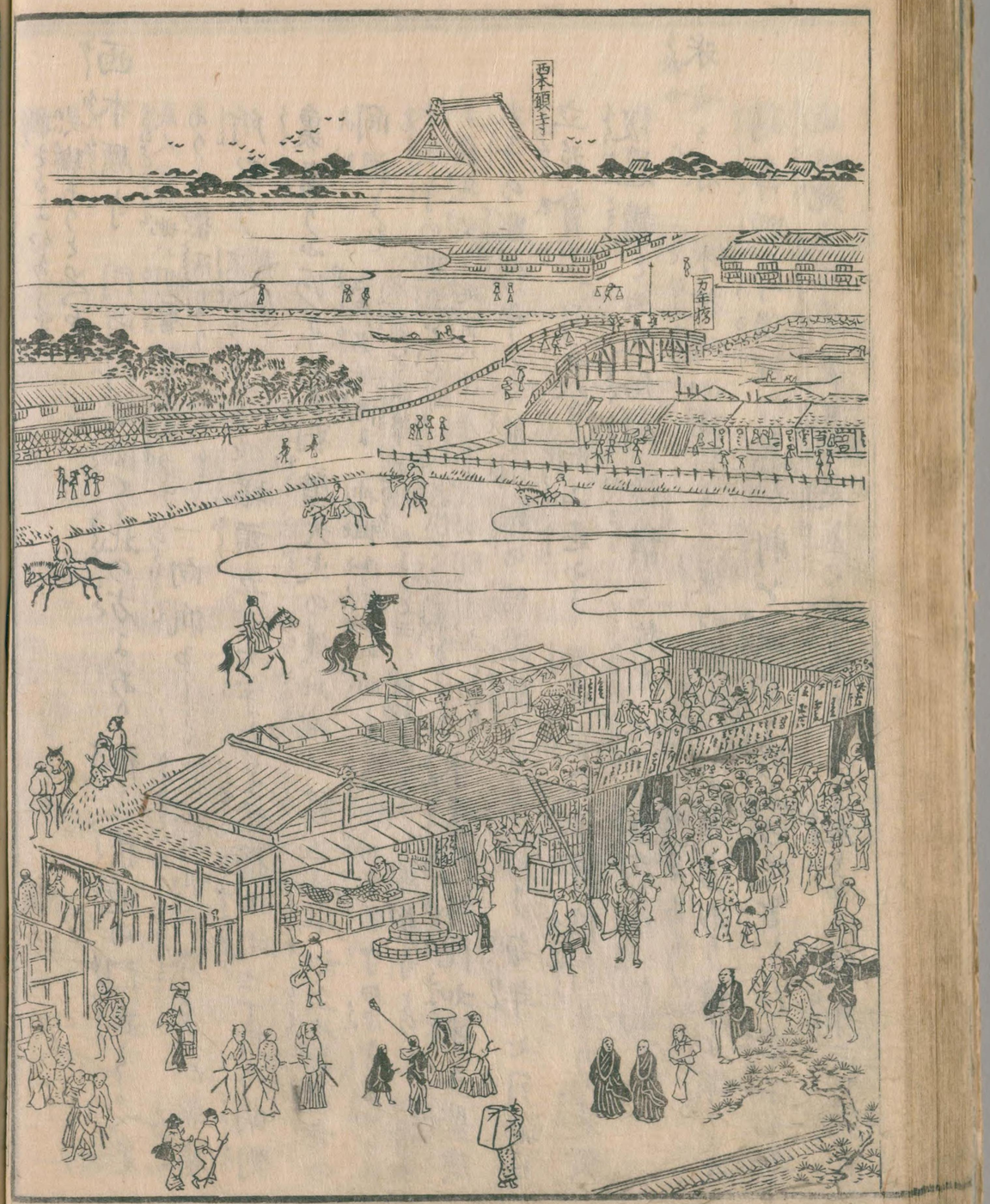
ガラス使用

願ましまはかなしす
灵驗ありといへり

西本願寺　同所川を隔て北の方にあり俗に築地の門跡といへり
或人云此地ハ明暦四年に仰のまゝ一向派にして京都西六條より此輪番
ありて築所なりといへり
所なり　宗派のこの是を塔頭五十七宇あり始横山町二丁目の南側
表方といふ
裏通りにありしを明暦大火の後此地に移さる准如上人を當寺の
開祖とす　江戸名所記に　神祖御在世の時より京都西本願寺の末寺を立られ
宗流を汲輩を勸らること云く白石先生云く善養寺といふ一向僧東
本願寺の建立をうけて公へ願ひて立る和かりとす　本尊阿弥陀如来を聖徳
和漢年契に延宝八年庚申西本願寺立とあり
太子の彫像にして泉州堺の信證院よりうつす　毎年七月七日
立花會十一月廿八日開山忌にて七昼夜の法會修行あり是成
報恩講と云又俗間御講と称す　塔中成勝院に能仙杉風翁の墳墓あり

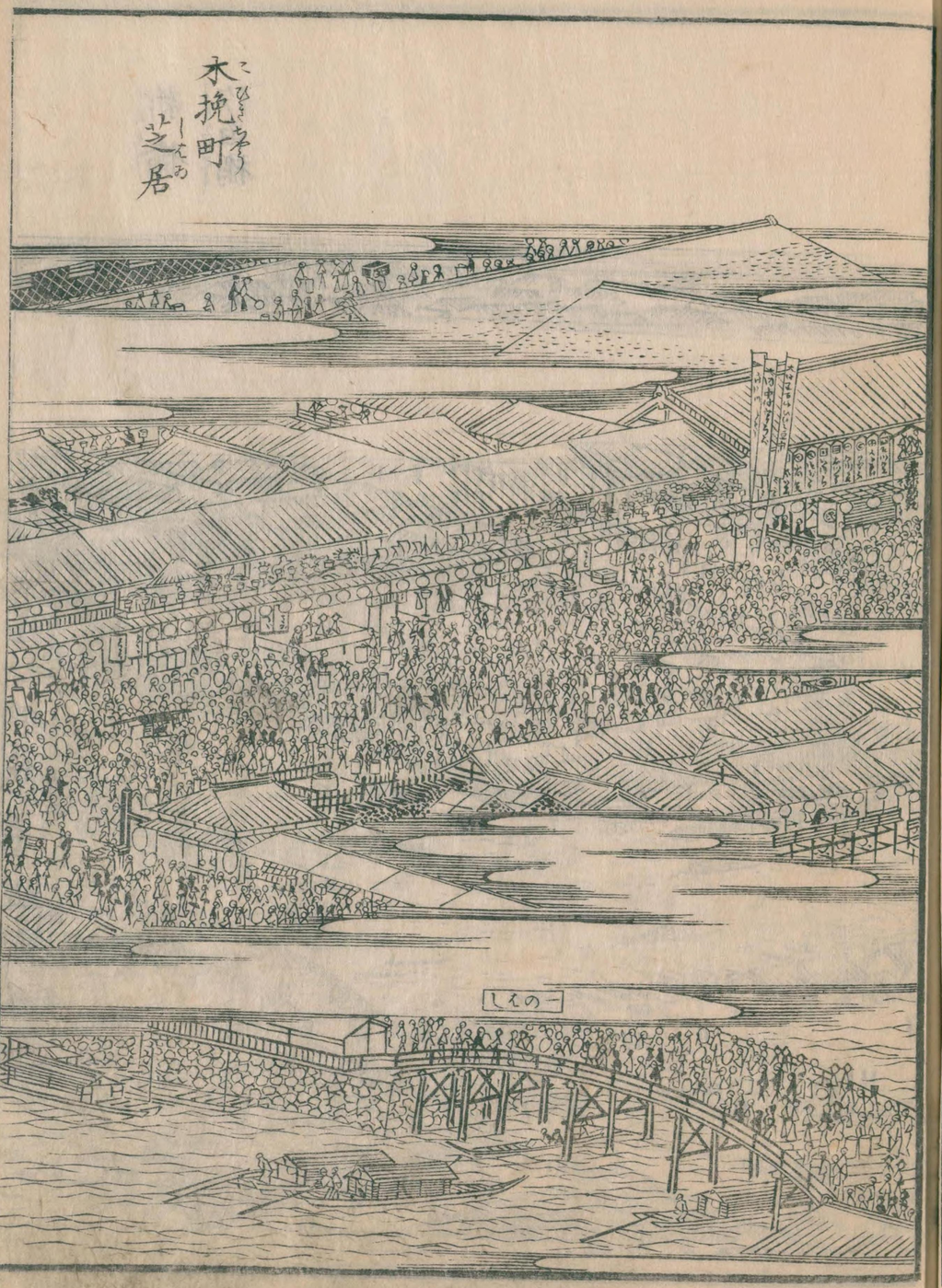
采女ヶ原　木挽町四丁目より東の方此所に馬場あり常に賑しく
講釋師浄瑠理の新しい軒を並べて行人の足をとゞむ享保九年
迄此地に松平采女正定基のやしきあるし故なり同年正月晦日

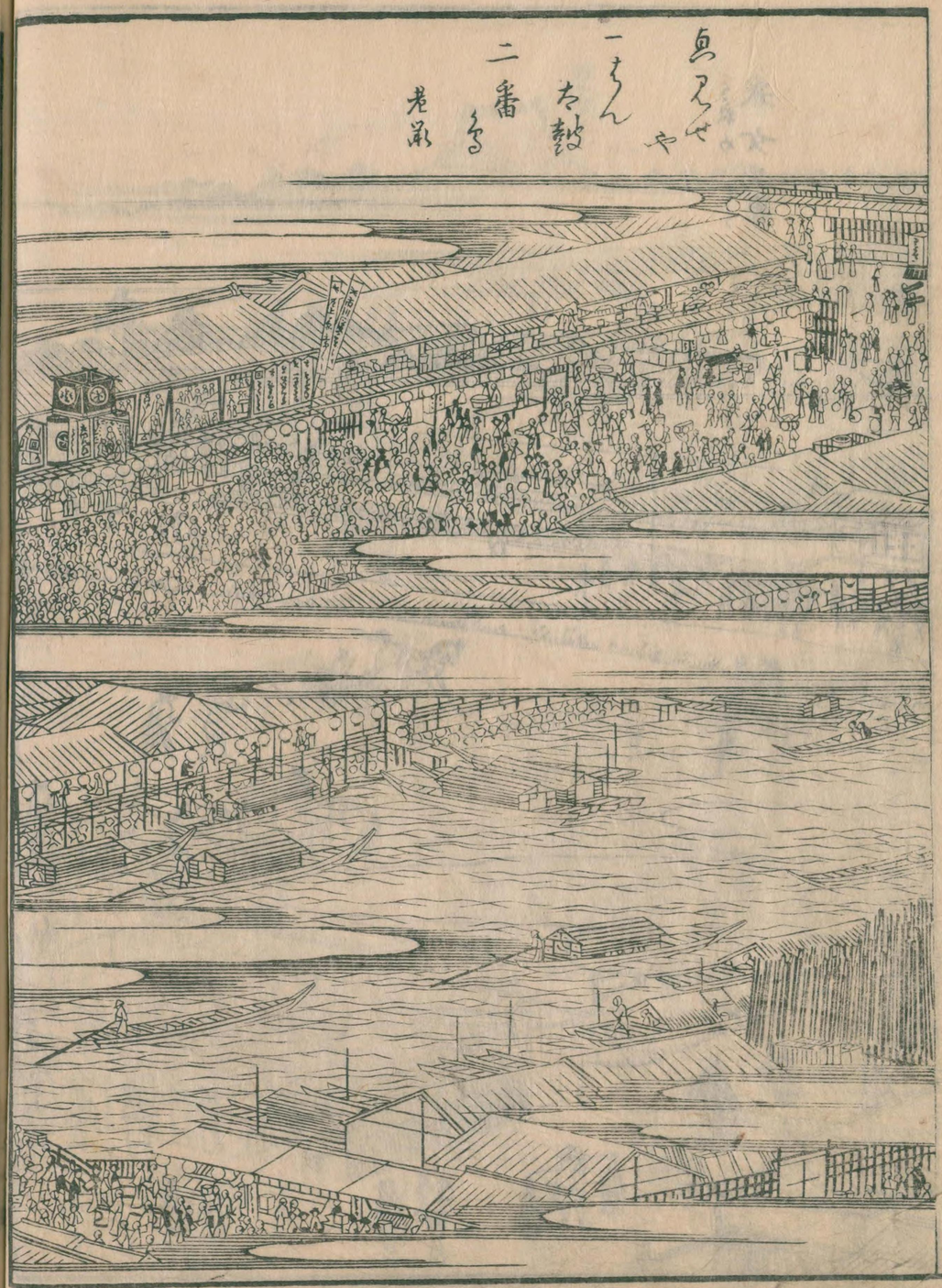
采女ヶ原



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

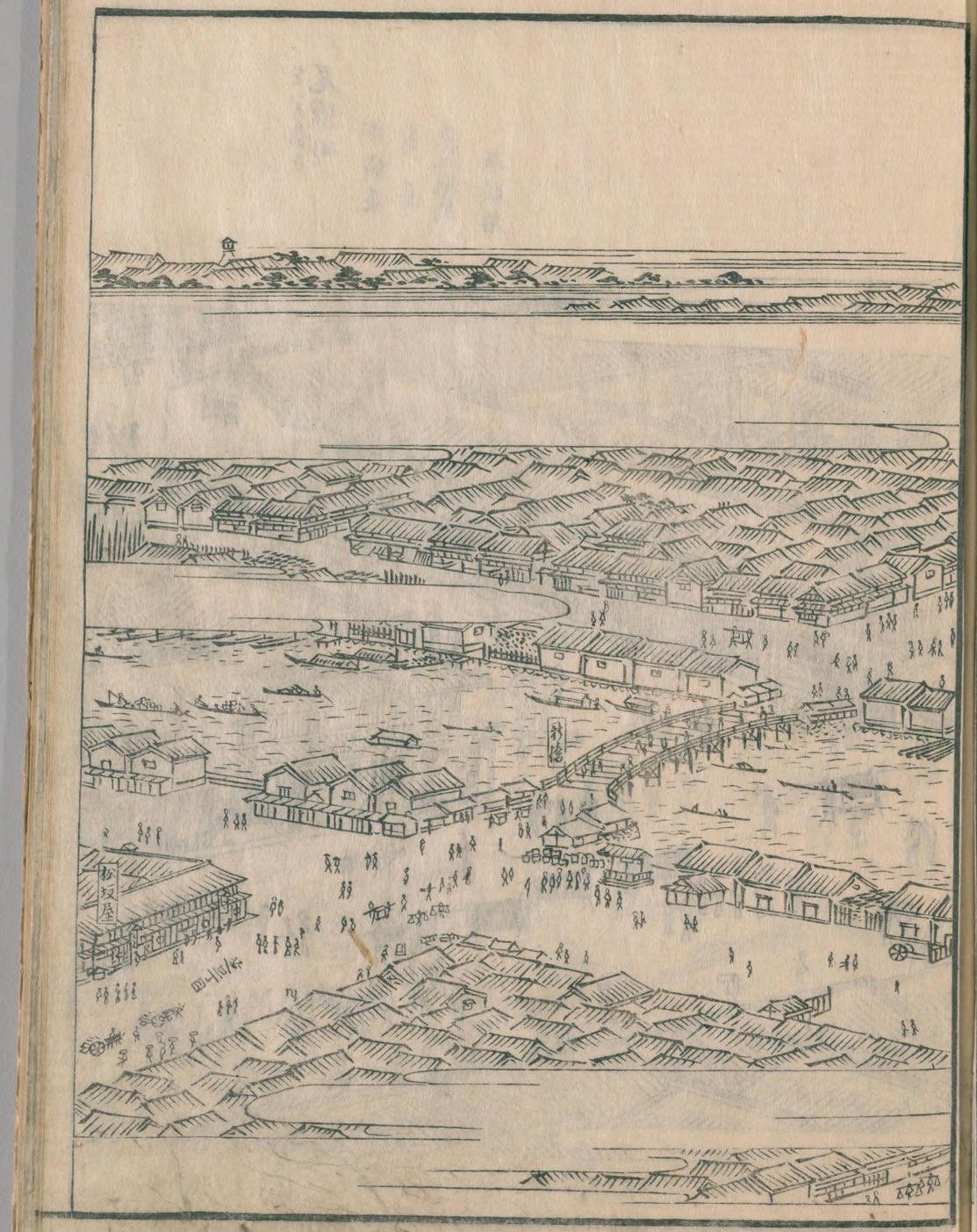
ガラス使用

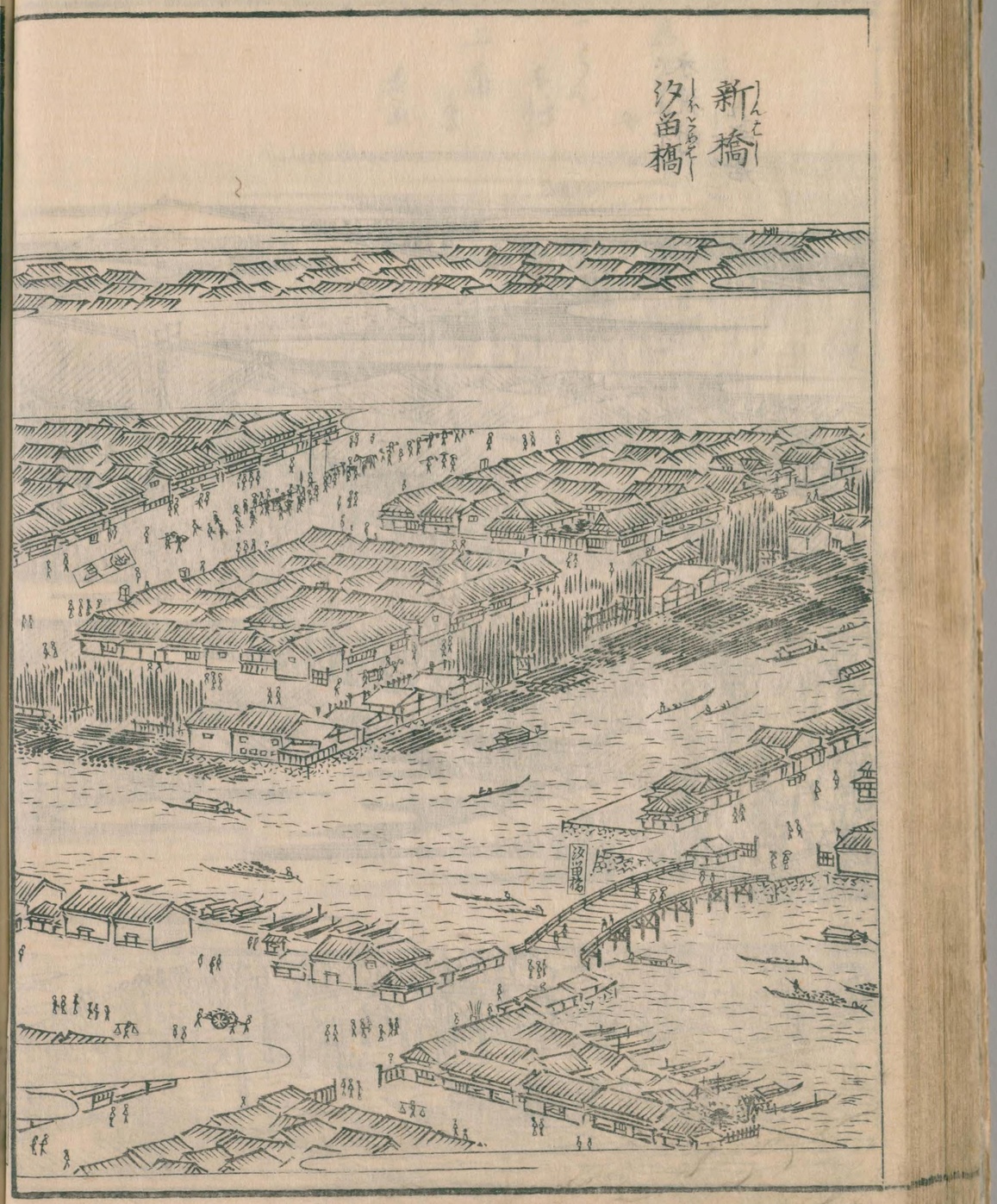




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

新橋
汐留橋





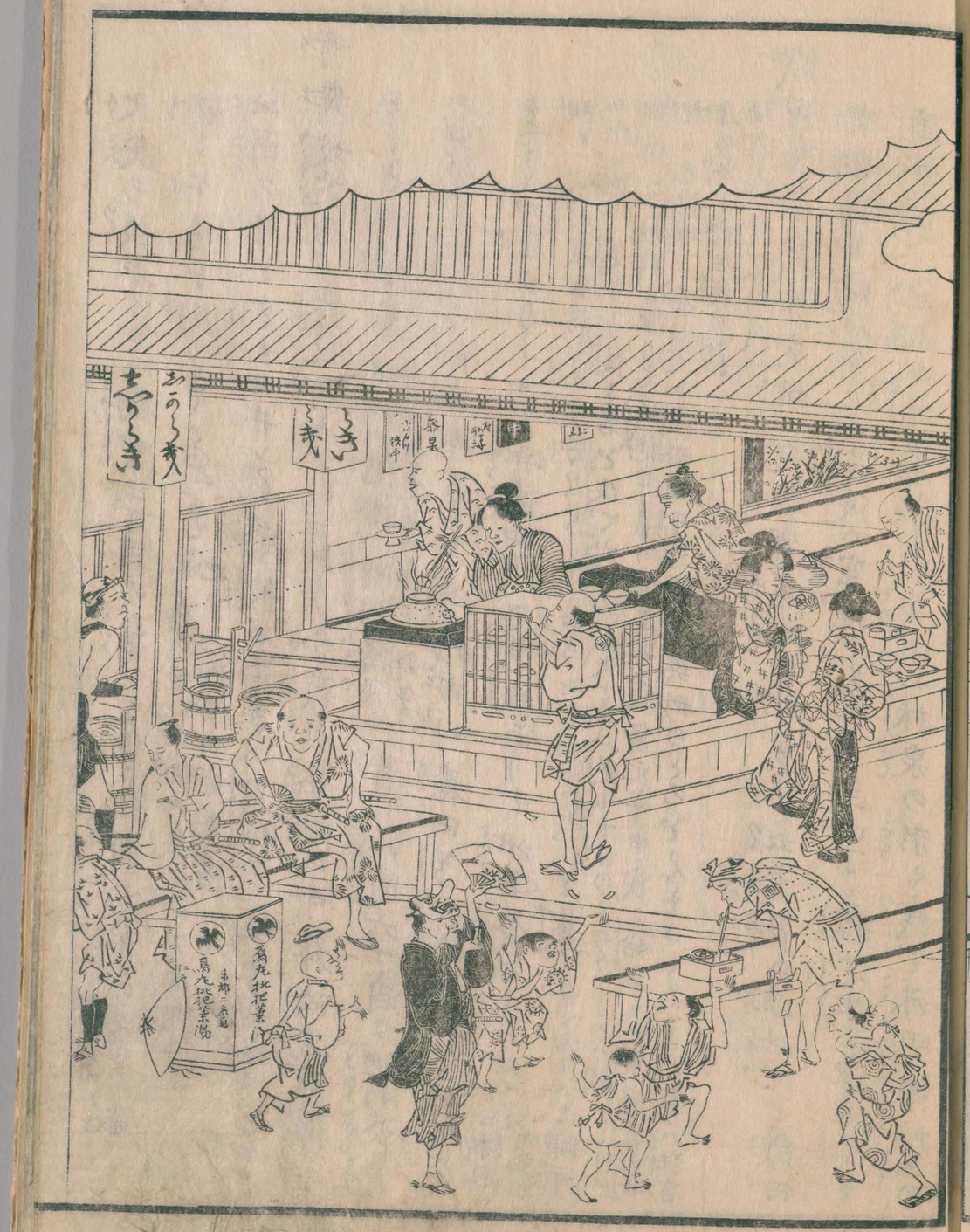
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

金六町
しからき
茶店



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

火災の後やゝきハ芝神明町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃より跡へ新ら馬場を開くとゝもに馬場の地ハ天明五年今の芝西應寺町その代地ゆく町屋の地馬場なりしやいなや此一所の井を采女の井とゝのゝも彼やゝきの用水ありかゝる名つくるなり

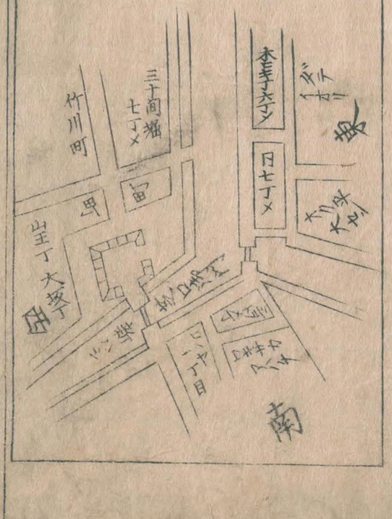
哥舞妓芝居　木挽町五丁目よりあり今森田勘弥の哥舞妓芝居綿ゝとゝ相續す　芝居の基原ハ堺町猿屋町哥舞妓芝居の条下より詳なり

名代の狂言座ありゝ中村市村森田等の芝居をおハせゝとゝもに四座ありゝと正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらるゝ山村長太夫座を是なり後ハ名を改て山村長太夫とゝのゝ初ハ岡村長治と云実子なくゝゝ役子七十郎とゝのゝ二代岡村五郎太夫ゝ是も女子のみありしゝ養て子とす三代岡村相續す此時より至りて断絶せり此芝居ハ正保元年申歳より始まるとそ東海道名所記よ木挽町よ喜太夫う浄瑠理ゝ外興類興形のものをそゝるゝあるとハ昔ハ狂言座の外よゝせ物のみ

織田有楽斎弟宅地　元数寄屋町の地なりと云慶長の頃此地を織田有楽斎ゝ賜ゝりゝ後ハ空地となりゝく三四丁う程芝生となりゝ春を摘草夏ハ池水ふ涼ゑんとそ其頃ハ林泉の形も残ゝ殊更櫻楓ホのゝ二樹多く春秋共ゝ遊望の地ゆく覧永の頃迄ハ折ふるゝ大樹此地より所遊猟をあるせられしとゝのゝ

有楽斎名長益源五郎と称せ乃其軒と号ゝ法名覚信長公の弟やゝく茶道を利休居士ゝ受て一家の風あり元和七年ゝ卒せし此人茶ゐゝ長ずる故ゝ宅地よりゝゝもものく数寄屋後世土人数寄屋の唱をとゝしゝく町の名よゝとゝりとゝなりゝ

新橋　大通り筋出雲町と芝口一丁目との間ゝ係る正徳元年辛卯朝鮮人来聘の前宝永七年庚寅此所ゝ新ら御門を御造営ありゝく芝口御門と唱へ橋の名も芝口橋と更らるゝ享保九年正月廿九日の火災ゝ焼亡もる此後ハ復旧の町家とのされゝり此川筋の東ハ木挽町七丁目と芝口新町の間ゝ架せをゝ汐留とゝのゝ



正徳四年
江戸圖

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

江戸名所圖會天樞之上畢

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

124
20
114

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用